

# 吉岡実全詩篇標題索引

〔改訂第3版〕



吉岡実全詩篇標題索引

〔改訂第3版〕

小林一郎 編

吉岡実全詩篇標題索引

〔改訂第3版〕

1940-1990  
全286篇

文藝空間

1995 / 2000 / 2012

© Kobayashi Ichiro 2012

吉岡実全詩篇標題索引〔改訂第3版〕  
*The Complete Yoshioka Minoru Poem Title Index*  
including a revised third edition

初版 1995年 印刷  
改訂第2版 2000年 印刷  
改訂第3版 2012年 公開

吉岡実全詩篇標題索引 例言

◇吉岡実(1919.4.15-1990.5.31)が生前、書籍・雑誌・新聞・パンフレットなどの印刷媒体に発表した、今日までに判明している全286篇の詩篇(そのうち単行詩集に未収録の〈波よ永遠に止れ〉を含む未刊詩篇21篇)を、標題の50音順に詩篇番号を付けて掲載した。

◇●印の3篇(詩篇番号130・133・175)は、のちに発表された作品に全行が変改吸収されているが、当初単独で発表されたため、収録した。

〈突堤にて〉——約2400字、初出は《現代詩》(飯塚書店発行)1962年1月号(109号)の〈詩人の散歩〉欄。現代詩文庫版《吉岡実詩集》に詩篇扱いで収録され、のち随想集《「死児」という絵》に再録——は、作者が随想に認定したと見なして、本索引の対象から外した。北園克衛詩集《固い卵》の詩句の引用だけから成る〈詩人の白き肖像〉は、吉岡実の創作とは見なさなかった。和歌集成〈歎歌〉、俳句集成〈奴草〉(いずれも稿本)、和歌集成〈蝶嬴鈔〉、歌集《魚藍》、句集《奴草》(いずれも刊本)も対象外とした。なお、作者が〈蝶嬴鈔〉を詩集《昏睡季節》から独立させて刊行した《魚藍》は《吉岡実全詩集》の巻末に追補されている。

◇記載項目は次のとおり。凡例の〔 〕内は補足説明である。はじめに見本を掲げる。

17 あまがつ嶺(あまがつしょう) [417-423]

すでに秋

V節90行▽《ユリイカ》(青土社発行)1975年12月臨時増刊号(7巻12号)二〇～二五ページ、本文9ポ22行1段組▼⑧サフラン摘み・30

◆詞書「北方舞踏派《塩首》の印象詩篇」。

詩篇番号 詩篇標題——副題(よみがな) [同じ標題で複数存在する詩篇に〈哀歌〉〈序詩〉〈静物〉〈断章〉〈夏〉〈挽歌〉〈風景〉〈牧歌〉の8タイトルがある] [《吉岡実全詩集》掲載ノンプル] [未掲載の場合は「—」と表示]

詩篇本文冒頭1行 [追込表記の散文詩型も同じ。《吉岡実全詩集》収録詩篇は同書に掲載された形(定稿形)、収録されていない場合は初出形]

節のある詩篇はその節数と詩篇の本文行数 [節表示の数字や節を区切るアスタリスク、行アキは行数として勘定しなかった。何行「分」は、全体が散文詩型であることを示す] ▽初出掲載書籍・雑誌・新聞・パンフレットなどの詳細 [特記なき場合、縦ベタ組・明朝体・スミ刷] ▼初収録単行詩集 [丸中数字(詩集番号)は何番めの詩集かを、アラビア数字はその詩集での掲載順(未刊詩篇の場合は発表順)を示す]、当該詩篇をのちに変改吸収した詩篇(詩篇番号)

◆備考 [詩篇本文前の詞書や題辞・献辞、詩篇本文後の註記や摺筆とおぼしい日付は、載録を心掛けた。追込で記載したため、原文の改行箇所を示したい場合は／で表わした]

◇単行詩集と底本に関する簡略な書誌は次項を、詳細な書誌は《現代詩読本——特装版 吉岡実》(思潮社、1991年4月15日)所収の拙編〈吉岡実書誌〉を、著作年譜は同じく拙編〈吉岡実年譜〉(同前)をそれぞれ参照されたい。なお、編者が調査・著述・作成し、毎月末日に定期更新するウェブサイト《吉岡実の詩の世界——詩人・装丁家吉岡実の作品と人物の研究》(<http://members.jcom.home.ne.jp/ikoba/>)に最新版の〈吉岡実書誌〉、吉岡陽子編〈吉岡実年譜〉・小林一郎編〈吉岡実年譜〔作品篇〕〉ほかを掲載している。併せてご覧いただきたい。

◇単行詩集に詩集番号を冠した簡略な書誌を掲げる (\*印は《吉岡実全詩集》の底本)。

◎詩集名	発行年月日	発行所名
①昏睡季節*	1940(昭和15)年10月10日	草蟬舎
②液体	1941(昭和16)年12月10日	草蟬舎
—液体*	1971(昭和46)年9月10日	湯川書房
③静物	1955(昭和30)年8月20日	私家版
④僧侶	1958(昭和33)年11月20日	書肆ユリイカ
⑤紡錘形	1962(昭和37)年9月9日	草蟬舎
—吉岡実詩集*	1967(昭和42)年10月1日	思潮社
⑥静かな家	1968(昭和43)年7月23日	思潮社
⑦神秘的な時代の詩	1974(昭和49)年10月20日	湯川書房
—神秘的な時代の詩*	1976(昭和51)年8月15日	書肆山田
⑧サフラン摘み*	1976(昭和51)年9月30日	青土社
⑨夏の宴*	1979(昭和54)年10月30日	青土社
⑩ポール・クレーの食卓*	1980(昭和55)年5月9日	書肆山田
⑪薬玉*	1983(昭和58)年10月20日	書肆山田
⑫ムーンドロップ*	1988(昭和63)年11月25日	書肆山田
—吉岡実全詩集	1996(平成8)年3月25日	筑摩書房

◇〔改訂第2版〕以降、本索引では《吉岡実全詩集》と同様、次の各詩集を底本とした。単行詩集収録の刊本作品は、《昏睡季節》は初版、《液体》は《叢書 溶ける魚 No.2》の再刊、《静物》・《僧侶》・《紡錘形》・《静かな家》は思潮社版《吉岡実詩集》、《神秘的な時代の詩》は三刊(《吉岡実全詩集》の〈吉岡実詩集覚書〉では「再刊」と表示している)、《サフラン摘み》・《夏の宴》・《ポール・クレーの食卓》・《薬玉》・《ムーンドロップ》はいずれもその初版を底本とした(ただし《夏の宴》は初版の誤りを正した1980年2月15日刊の二版に拠った)。単行詩集未収録の未刊詩篇は、初出掲載書籍や誌紙に拠った(初出後に再録されている〈波よ永遠に止れ〉と〈スワンベルグの歌〉の2篇は、著者の手入れのある再録形を採った)。詩篇の標題や本文は、《昏睡季節》は旧かな、《液体》以降は新かな表記とし、詩集名を含めて漢字は原則として常用漢字は新字体を、それ以外はいわゆる康熙字典体を使用した。《僧侶》以降の単行詩集巻末にある〈初出〔誌紙〕一覧〉(ただし《静かな家》にはない)や前掲の拙編〈吉岡実年譜〉の記載内容と異なる場合は、本索引最新版のそれを優先されたい。

◇〈吉岡実全詩篇標題索引 目録〉には、本索引に収録した吉岡実の全286篇の詩篇標題を詩篇番号とともに発表順に掲載し、同題の詩篇は本文冒頭1行を〔 〕内に付記した。改題された作品は、←のあとに原題を掲げた。索引本文ページの柱文に詩篇番号付きの詩篇標題(偶数ページは最初の、奇数ページは最後の)を入れたので、〈目次〉も〈索引〉も設けない。

2012年11月30日

小林一郎



## 一九四〇年代

212	春
193	夏〔注射器の午前九時十二分〕
6	秋
237	冬
268	遊子の歌
14	朝の硝子
104	歲月
23	あるひとへ
117	七月
206	白昼消息
42	臙脂
261	面紗せる会話
246	放埒
173	断章〔わがこころになやみはず〕
58	葛飾哀歌
74	桐の花
24	杏菓子
230	病室
100	昏睡季節1
101	昏睡季節2
215	挽歌〔洋燈は消え〕
210	花冷えの夜に
177	朝食
188	溶ける花
134	蒸発
7	秋の前奏曲
118	失題
41	絵本
95	孤独
248	牧歌〔齒車が夥しくおちてゆく〕
162	相聞歌
172	誕生
62	乾いた婚姻図
225	微風
154	静物〔鷺鳥の頸ねむく〕
285	忘れた吹笛の抒情
187	透明な花束
224	微熱ある夕に
232	風景〔猿の頭に夕の灯がとまり〕
227	ひやしんす
208	花遅き日の歌

256	みどりの朝に——朝の序曲
22	或る葬曲の断想——墓地にて
32	失われた夜の一章
204	灰色の手套
38	液体I
39	液体II
93	午睡
209	花の肖像
189	灯る曲線
1	哀歌〔毛皮にうずまって〕
272	夢の翻訳——紛失した少年の日の唄
35	海の章
205	敗北
164	即興詩
191	汀にて
174	断章〔永劫に舟の去りゆく〕

## 一九五〇年代

155	静物〔夜の器の硬い面の内で〕
156	静物〔夜はいつそう遠巻きにする〕
157	静物〔酒のない瓶の内の〕
158	静物〔台所の汚れた塩〕
21	或る世界
65	樹
169	卵
238	冬の歌
198	夏の絵
233	風景〔緑の樹は〕
109	讃歌
216	挽歌〔わたしが水死人であり〕
121	ジャングル
269	雪
78	寓話
26	犬の肖像
52	過去
91	告白
66	喜劇
31	陰謀
120	島
113	仕事
249	牧歌〔村にきて〕

163	僧侶
247	ポール・クレーの食卓
171	単純
92	固形
194	夏〔蠟びきの食物の類をみて歩く〕
48	回復
77	苦力
114	死児
263	喪服
148	聖家族
103	サーカス
184	伝説
239	冬の絵
33	美しい旅
222	人質
63	感傷
274	ライラック・ガーデン
282	老人頌
258	無罪・有罪
44	遅い恋
82	果物の終り
129	唱歌 ← 牧歌
87	下痢
243	紡錘形Ⅰ ← 紡錘形1
265	夜会
18	編物する女
124	呪婚歌
266	夜曲
30	陰画
279	裸婦
84	首長族の病氣
25	田舎

## 一九六〇年代

220	斑猫
2	哀歌〔それは或は風説だろう〕
244	紡錘形Ⅱ ← 紡錘形2
240	冬の休暇
254	水のもりあがり
199	波よ永遠に止れ
252	巫女——あるいは省察
27	衣鉢
125	受難

178	鎮魂歌
61	狩られる女——ミロの絵から
67	寄港
185	灯台にて
73	霧
201	沼・秋の絵
123	修正と省略
218	晩春
111	塩と藻の岸べで
86	劇のためのト書の試み
34	馬・春の絵
90	珈琲
262	模写——或はクートの絵から
166	滞在
159	聖母頌
79	九月
241	冬の森
264	桃——或はヴィクトリー
267	やさしい放火魔
214	春のオーロラ
54	家族
116	静かな家
143	スープはさめる
211	花・変形
231	ヒラメ
96	孤独なオートバイ
190	内的な恋唄
89	恋する絵
213	春の絵
4	青い柱はどこにあるか？
195	夏から秋まで
280	立体
250	マクロコスモス
234	フォークソング ← フォーク・ソング
112	色彩の内部
141	スイカ・視覚的な夏
140	神秘的な時代の詩
102	崑崙
19	雨
131	少女
144	スワンベルグの歌
110	三重奏
255	蜜はなぜ黄色なのか？
137	序詩〔うんすんかるたを想起させる〕



- 138 序詩〔白地へ白く白鳥類は帰る〕  
 196 夏の家  
 283 わが馬ニコルスの思い出  
 150 聖少女  
 223 鄙歌 ← ヘアー  
 99 コレラ

## 一九七〇年代

- 180 低音  
 203 葉  
 228 ヒヤシンス或は水柱  
 281 ルイス・キャロルを探す方法  
 12 悪趣味な冬の旅  
 181 弟子  
 167 タコ  
 251 マダム・レインの子供  
 145 聖あんま語彙篇  
 20 『アリス』狩り  
 107 サフラン摘み  
 221 ビクニック  
 182 田園  
 186 動物  
 284 わが家の記念写真  
 235 フォーサイド家の猫  
 151 生誕  
 161 草上の晚餐  
 119 自転車上の猫  
 29 異霊祭  
 47 絵画  
 260 メデアム・夢見る家族  
 236 不滅の形態  
 168 舵手の書  
 226 白夜  
 165 ゾンネンシュターンの船  
 105 サイレント・あるいは鮭  
 10 悪趣味な夏の旅  
 83 示影針（ゲノーモン）  
 49 カカシ  
 9 悪趣味な内面の秋の旅  
 17 あまがつ頃  
 139 人工花園  
 132 少年  
 275 楽園

- 97 子供の儀礼  
 13 曙  
 242 部屋  
 88 幻場  
 51 影の鏡  
 11 悪趣味な春の旅  
 278 螺旋形  
 28 異邦  
 115 使者  
 68 紀行  
 217 晩夏  
 253 水鏡  
 80 草の迷宮  
 69 狐  
 271 夢のアステリスク  
 55 形は不安の鋭角を持ち……  
 273 雷雨の姿を見よ  
 160 蟬  
 176 父・あるいは夏  
 197 夏の宴  
 46 織物の三つの端布  
 ●175 断想  
 192 謎の絵  
 277 裸子植物  
 75 金柑譚  
 202 野  
 37 詠歌  
 98 この世の夏  
 152 生徒 ←〔初出時標題なし〕  
 43 円筒の内側  
 5 「青と発音する」

## 一九八〇年代

- 108 猿  
 179 ッグミ  
 200 鶏 ← にわとり  
 126 豎の声 ← 豎の声  
 40 絵のなかの女  
 128 巡礼  
 60 壁掛  
 149 青枝篇 ← 春の伝説  
 81 薬玉  
 50 影絵

3	哀歌〔わたしの世界は 小さな峠の茶屋で〕
183	天竺
170	垂乳根
57	郭公 ← 郭公あるいは青い森
122	秋思賦
127	春思賦
64	甘露
94	東風
245	蓬萊
147	青海波
276	落雁
72	求肥
229	白狐
●130	小曲
●133	少年 あるいは秋
153	聖童子譚
286	わだつみ
257	ムーンドロップ
207	薄荷
56	カタバミの花のように
8	秋の領分
270	雪解
59	寿星 (カノプス)
16	亜麻
146	聖あんま断腸詩篇
136	叙景
76	銀幕
259	産霊 (むすび)
45	苧環 (おだまき)
71	休息
142	睡蓮
53	鶺鴒 ← かささぎ
15	青空 (アジュール) ← 《 <sup>アジュール</sup> 青空》
219	晩鐘
70	銀鮫 (キメラ・ファンタスマ)
135	〔食母〕頌
36	永遠の昼寝
85	雲井

一九九〇年代

106	沙庭
-----	----

## あ 行

## 1 哀歌（あいか）[53]

毛皮にうずまって

8行▽詩集《液体》（草蟬舎刊）1941年12月10日、三五ページ、本文五号1段組▼②液体・31

## 2 哀歌（あいか）[721-723]

それは或は風説だろう

35行▽《鱧》（書肆ユリイカ発行）1960年2月（6号）八～九ページ、本文五号21行1段組▼未刊詩篇・9

## 3 哀歌（あいか）[611-614]

わたしの世界は 小さな峠の茶屋で

3節58行▽《ユリイカ》（青土社発行）1982年7月号（14巻7号）四六～四九ページ〈追悼＝西脇順三郎〉、本文9ポ21行1段組▼②薬玉・13

◆詞書「追悼・西脇順三郎先生」。初出は註記「\*第二章は西脇順三郎『詩学』より抄出した。／なお他の個所でも、引用した「章句」がある。」のあとに「(一九八二・六・一〇 通夜の日)」。

## 4 青い柱はどこにあるか？（あおいはしらはどこにあるか）[249-252]

闇夜が好き

51行▽高井富子舞踏公演〈形而情学〉チラシ（——）1967年7月3日、本文12ポ1段組▼⑦神秘的な時代の詩・6

◆初出詞書に「土方巽の秘儀によせて」なし。初出末尾「一九六七・五・一五」のあとに「この作品は吉岡実氏が土方巽におくったものです」。

## 5 「青と発音する」（あおとはつおんする）[524-527]

秋されば

55行▽《雷鳴の頸飾り——瀧口修造に》（「雷鳴の頸飾り」刊行会刊）1979年12月10日、一〇一～一〇五ページ、本文14ポ17行1段組▼⑨夏の宴・27

◆題辞「「青ずんだ鏡のなかに飛びこむのは今だ」 瀧口修造」。

## 6 秋（あき）[9-10]

蛇の腹の瘡痕に仄めく昼の星

8行▽詩集《昏睡季節》（草蟬舎刊）1940年10月10日、五ページ、本文9ポ1段組▼①昏睡季節・3

## 7 秋の前奏曲（あきのぜんそうきょく）[31]

朝の皿を拭きおわり

9行▽詩集《液体》（草蟬舎刊）1941年12月10日、八ページ、本文五号1段組▼②液体・6

## 8 秋の領分（あきのりょうぶん）[653-655]

「西洋梨の実はどっしりと

32行▽〈小沢純展〉パンフレット（青木画廊）1985年9月17日、本文16級17行1段組▼②ムーンドロップ・5

◆単行詩集の初出一覧に「(改作)」と記されている。

## 9 悪趣味な内面の秋の旅（あくしゅみなないめんのおきのたび）[423-431]

内なる旅とは負の回路をめぐり

7節145行▽《文藝》（河出書房新社発行）1975年11月号（14巻11号）二二四～二三一ページ、本文9ポ23行1段組▼⑧サフラン摘み・31

◆初出末尾「1975・9・22」。

## 10 悪趣味な夏の旅（あくしゅみななつのたび）[402-407]

ギルバートきみは善良すぎる

6節72行▽《新劇》（白水社発行）1975年7月号（22巻7号）五八～六一ページ、本文9ポ23行1段組▼⑧サフラン摘み・26

## 11 悪趣味な春の旅（あくしゅみなはるのたび）[501-503]

樹木とろうそくが直立する

43行▽《日本読書新聞》（日本出版協会発行）1977年1月17日号（1889号）一面、本文9ポ22行2段組▼⑨夏の宴・19

◆初出「カット・金井久美子」。

## 12 悪趣味な冬の旅（あくしゅみなふゆのたび）[322-326]

酔の過ぎる悪しき想い出のために

85行▽《中央公論》（中央公論社発行）1972年7月号（87巻7号）三二八～三三一ページ、本文9ポ23行1段組▼⑧サフラン摘み・6

## 13 曙（あけぼの）[455-458]

「火の消えたような

66行▽《ユリイカ》（青土社発行）1976年11月臨時増刊号（8巻13号）二二～二五ページ、本文9ポ22行1段組▼⑨夏の宴・8

◆初出註記「注 引用句は主に、エズラ・パウンド、飯島耕一の章句を借用した」。

## 14 朝の硝子（あさのがらす）[12]

裏がへされた微風が掌から

6行▽詩集《昏睡季節》（草蟬舎刊）1940年10月10日、八ページ、本文9ポ1段組▼①昏睡季節・6

## 15 青空（アジュール）（アジュール）[699-700]

甘酸っぱい<sup>アジュール</sup>（青空）の下で

20行▽《文學界》（文藝春秋発行）1988年1月号（42巻1号）九ページ、本文9ポ1段組（コラム〈扉の詩〉）▼②ムーンドロップ・16

◆初出時の標題「(青<sup>アジュール</sup>空)」(目次では「青(アジュール)空」)。初出カットは犬飼直彦。

## 16 亜麻(あま) [730]

「赤と緑の線で出来た

10行▽《文藝春秋》(文藝春秋発行)1986年5月号(64巻5号)八九ページ、本文8ポ13行1段組(コラム)▼未刊詩篇・17

## 17 あまがつ頰(あまがつしょう) [417-423]

すでに秋

V節90行▽《ユリイカ》(青土社発行)1975年12月臨時増刊号(7巻12号)二〇～二五ページ、本文9ポ22行1段組▼⑧サフラン摘み・30

◆詞書「北方舞踏派《塩首》の印象詩篇」。

## 18 編物する女(あみものするおんな) [154-155]

たっぷりと畝編みにしたブルオーバー 今夜の料理には玉葱

19行分▽《鰐》(書肆ユリイカ発行)1959年10月号(3号)六～七ページ、本文9ポ27字詰1段組▼⑤紡錘形・8

## 19 雨(あめ) [263-266]

それはたとえば

66行▽《現代詩手帖》(思潮社発行)1968年11月号(11巻11号)三二～三五ページ、本文五号20行1段組▼⑦神秘的な時代の詩・9

## 20 『アリス』狩り(アリスがり) [345-350]

それはたくさんの病人の夢を研究しなけりゃならん

76行▽《アリスの絵本——アリスの不思議な世界》(牧神社刊)1973年5月1日、二一～二四ページ、本文五号28字詰28行1段組▼⑧サフラン摘み・12

◆初出は、目次にある「アリス狩りのためのアリス工房 Alice workshop for the hunting of Alice」中の一篇。

## 21 或る世界(あるせかい) [62]

薄明のなかで 呼びおこされ うごきだし やがて立ちあが

10行分▽詩集《静物》(私家版刊)1955年8月20日、一八～一九ページ、本文五号30字詰11行1段組▼③静物・5

◆吉岡が《静物》を編集するに当たって、おそらく詩ノートに書いた下書きを一篇ごとに原稿用紙に清書した段階では詩篇の順番は決まっておらず、詩集の構成が決定してから鉛筆で通しノンブルを記入したものと思われる。この時点では「14」「15」とノンブルを記した、刊本の《静物》のどこにも見えない〈音楽〉という詩篇が存在したはずだ。〈或る世界〉はその〈音楽〉に替わる新原稿と考えられる。

## 22 或る葬曲の断想——墓地にて(あるそうきよくのだんそう ぼちにて) [45]

午睡は夥しく

12行▽詩集《液体》(草蟬舎刊)1941年12月10日、二七ページ、本文五号1段組▼②液体・23

## 23 あるひとへ(あるひとへ) [13]

のこりし一本の巻煙草のながみよ

5行▽詩集《昏睡季節》(草蟬舎刊)1940年10月10日、一〇ページ、本文9ポ1段組▼①昏睡季節・8

## 24 杏菓子(あんずがし) [20]

蛸鱸が這つて光つた空間を

5行▽詩集《昏睡季節》(草蟬舎刊)1940年10月10日、二〇ページ、本文9ポ1段組▼①昏睡季節・17

## 25 田舎(いなか) [159-160]

納屋であくびをくりかえす

25行▽《同時代》(黒の会発行)1959年12月(10号)六六～六七ページ、本文9ポ1段組▼⑤紡錘形・10

## 26 犬の肖像(いぬのしょうぞう) [82-85]

或る時わたしは帰ってくるだろう

7節40行▽詩集《静物》(私家版刊)1955年8月20日、六〇～六五ページ、本文五号11行1段組▼③静物・16

◆稿本では最初の標題が〈雨ざらしの犬〉であり、同時に、あるいは後日〈犬の肖像〉と副題が付けられ、最終的に〈犬の肖像〉となった。

## 27 衣鉢(いはつ) [169-171]

たたみの黄いろ

39行▽《ユリイカ》(書肆ユリイカ発行)1961年1月号(6巻1号)五六～五七ページ、本文9ポ1段組▼⑤紡錘形・16

## 28 異邦(いはう) [445-447]

聖堂の番人が箒をかついで帰ってくる

31行▽〈ヘルマン・セリエント展〉パンフレット(青木画廊)1977年5月31日、〔三ページ〕、本文15級16行2段組▼⑨夏の宴・5

◆初出詞書「セリエントの絵によせて」。

## 29 異霊祭(いれいさい) [371-380]

朝は砂袋に見える

8節161行▽詩《異霊祭》(書肆山田刊〈書下ろしによる叢書 草子3〉)1974年4月25日、四～一八ページ、本文五号13行1段組▼⑧サフラン摘み・19

◆初出末尾「1974・2・14」。

## 30 陰画(いんが) [150-152]

光りへ抽きだされ

35行▽《文學界》(文藝春秋新社発行)1959年11月号(13巻11号)一〇〇〜一〇二ページ「裸婦」他四篇〔〈陰画〉〈僧侶〉〈喪服〉〈単純〉〕、本文9ポ1段組▼⑥紡錘形・6

◆初出「カット・伊原通夫」。

31 陰謀(いんぼう) [718-719]

百匹の猫には百匹の敵がいる ある一匹の心やさしい猫が

19行分▽《現代詩》(緑書房発行)1956年7月号(3巻6号)四八〜四九ページ、本文8ポ26字詰19行1段組(コラム)▼未刊詩篇・6

◆初出末尾「一九五六・五・二十一」。

32 失われた夜の一楽章(うしなわれたよるのいちがくしょう) [46]

遠ざかってゆく青い水泡

8行▽詩集《液体》(草蟬舎刊)1941年12月10日、二八ページ、本文五号1段組▼②液体・24

33 美しい旅(うつくしいたび) [118-119]

老給仕は食器をかたづけ去る ドアの外に出たというより

19行分▽詩集《僧侶》(書肆ユリイカ刊)1958年11月20日、五八〜五九ページ、本文五号27字詰13行1段組▼④僧侶・16

◆執筆は1958年。

34 馬・春の絵(うま はるのえ) [194-195]

わたしはそのとき競馬場の芝生にねて 円柱球の馬を見てい

20行分▽《文藝》(河出書房新社発行)1963年1月号(2巻1号)一二〜一三ページ、本文10ポ25字詰1段組▼⑥静かな家・5

35 海の章(うみのしょう) [一]

貧しくて さびしくなつたら

16行▽《漁》(東洋堂発行)1947年9月号(2巻9号)一ページ、本文10ポ四分アキ20行1段組▼未刊詩篇・1

36 永遠の昼寝(えいえんのひるね) [733-734]

コオロギが鳴いて

25行▽《永遠の旅人 西脇順三郎——詩・絵画・その周辺》(新潟市美術館刊)1989年4月1日、一三一ページ、本文10ポ47行1段組▼未刊詩篇・19

37 詠歌(えいか) [516-518]

「長石の色をした雨は打ちつづける」

37行▽《ユリイカ》(青土社発行)1979年7月号(11巻9号)二一〜二三ページ、本文9ポ22行1段組▼⑨夏の宴・23

38 液体I(えきたいいち) [48]

水晶の粒にみどりの蛇の影がゆら

11行▽詩集《液体》(草蟬舎刊)1941年12月10日、三〇ページ、本文五号1段組▼②液体・26

39 液体II(えきたいに) [49]

その指さきにあらゆる物体が溶化し

11行▽詩集《液体》(草蟬舎刊)1941年12月10日、三一ページ、本文五号1段組▼②液体・27

40 絵のなかの女(えのなかのおんな) [一]

「かげろうは消え

18行▽《別冊一枚の繪》(一枚の繪発行)1981年10月(4号)〈花鳥風月の世界——新作／洋画・日本画選〉、一八六ページ、本文12級1段組▼未刊詩篇・15

◆初出註記「本誌のための書き下ろし〔……〕」、初出は詩篇の上部に「弦田英太郎 青い首飾り 6号 油絵」がカラーで掲載されている。

41 絵本(えほん) [33]

春のパセリの匂うまど

12行▽詩集《液体》(草蟬舎刊)1941年12月10日、一〇ページ、本文五号1段組▼②液体・8

42 臙脂(えんじ) [15-16]

洋皿に春の蚊がとまり睡い日

6行▽詩集《昏睡季節》(草蟬舎刊)1940年10月10日、一三ページ、本文9ポ1段組▼①昏睡季節・11

43 円筒の内側(えんとうのうちがわ) [527-532]

「石や木とじかに結びついている」

6節85行▽《ユリイカ》(青土社発行)1979年11月臨時増刊号(11巻14号)三四〜三九ページ、本文9ポ22行1段組▼⑨夏の宴・28

◆題辞「「言語というものは固体／粒であると同じに波動である」／大岡信」。末尾「(一九七九・一〇・九)」。

44 遅い恋(おそいこい) [719-720]

ガリ氏の上半身は裸だ むしろ枯木の存在にちかく がらさ

12行分▽《現代詩手帖》(世代社発行)1959年6月号(1号)六六〜六七ページ、本文9ポ27字詰14行1段組▼未刊詩篇・7

◆初出時、約400字の散文〈詩人のノオト〉を付す。

45 苧環(おだまき)(おだまき) [692-694]

糸巻きの糸をたぐる

34行▽《季刊 花神》(花神社発行)1987年8月(1巻2号)一四〜一五ページ、本文10ポ19行1段組▼⑩ムーンドロップ・14

- 46 織物の三つの端布（おりもののみつつのはぎれ）[486-490]  
 「(この積み藁が紫色である) のは  
 ＊印が3節を従える74行▽《エビステマー》(朝日出版社発行) 1978年11月号(4巻10号)  
 二四八～二五三ページ、本文10ポ14行1段組▼⑨夏の宴・16  
 ◆題辞「「イメージはたえず事物へ／しかしまた同時に／意味へ向おうとする」／宮川淳」。

## か行

- 47 絵画(かいが) [369-371]  
 画家がテーブルを描くとき  
 30行▽《風景》(悠々会発行) 1974年5月号(15巻5号) 五四～五五ページ、本文10ポ19行1段組▼⑧サフラン摘み・18
- 48 回復(かいふく) [111-112]  
 らっきょうを囓る それがぼくの好みの時だ 病棟の毛布の  
 20行分▽《詩学》(詩学社発行) 1958年5月号(13巻6号) 五三ページ、本文9ポ20字詰16行2段組▼④僧侶・12
- 49 カカシ(カカシ) [412-413]  
 シジミの化石の出る  
 15行▽《旅》(日本交通公社発行) 1975年9月号(49巻10号) 二〇〇ページ(対向の二〇一ページは後出カラー写真)、本文20級1段組▼⑧サフラン摘み・28  
 ◆初出「嵯峨野の案山子 '74「旅」写真コンテスト入選作品 カメラ 河原誠三」。
- 50 影絵(かげえ) [574-575]  
 干草や枯柴のかげへ  
 24行▽太陽シリーズ30——太陽美人画シリーズII《夏の女》(平凡社刊) 1982年5月25日、一一ページ、本文24級楷書体23行1段組(刷色は朱)▼⑩薬玉・3  
 ◆初出詞書「〈夏の女〉によせる」。
- 51 影の鏡(かげのかがみ) [558-559]  
 観念をまもるために  
 11行▽山本美智代オフセット版画集2《銀鏡——MIRRORING》(アトリエ山本刊) 1976年12月5日、六ページ、本文12級1段組▼⑩ポール・クレアの食卓・17
- 52 過去(かこ) [85-87]  
 その男はまずほそいくびから料理衣を垂らす  
 30行▽詩集《静物》(私家版刊) 1955年8月20日、六六～六九ページ、本文五号25字詰11行1段組▼③静物・17

- 53 鵲(かささぎ) [707-709]  
 (蠟をたらしたような冬)  
 35行▽《毎日新聞〔夕刊〕》(毎日新聞東京本社発行) 1987年12月28日(40120号) 四面、本文新聞活字一倍扁平1段組▼⑩ムーンドロップ・18  
 ◆初出時の標題「かささぎ」。初出「写真・佐々木正和」。
- 54 家族(かぞく) [551]  
 ぼくは生まれる  
 10行▽《文藝春秋》(文藝春秋発行) 1966年3月号(44巻3号) 八七ページ、本文8ポ1段組(コラム)▼⑩ポール・クレアの食卓・11
- 55 形は不安の鋭角を持ち……(かたちはふあんのえいかくをもち) [469-472]  
 枝の上で小鳥がチッチと鳴く  
 III節52行▽《現代詩手帖》(思潮社発行) 1978年4月号(21巻4号) 二二～二四ページ、本文9ポ23行1段組▼⑨夏の宴・11  
 ◆題辞「〈複眼の所有者は憂愁と虚無に心を蝕ばれる〉 飯田善國」。
- 56 カタバミの花のように(カタバミのはなのように) [644-646]  
 「兎を抱く少女像」  
 29行▽《朝日新聞〔夕刊〕》(朝日新聞東京本社発行) 1985年7月26日(35760号) 七面、本文7.5ポ3段組▼⑩ムーンドロップ・2  
 ◆初出・絵「加納光於」。単行詩集の初出一覧には「(改作)」と記されている。
- 57 郭公(かっこう) [584-586]  
 帽子工場の裏へまわる  
 33行▽〈M. エルンスト, ケルンのダダ展—MAX ERNST, DADA in KÖLN 1919 / FIAT MODES PEREAT ARS〉パンフレット(佐谷画廊) 1982年12月8日、〔四～五ページ〕、本文10ポ1段横組▼⑩薬玉・6  
 ◆初出パンフレットは左開き。初出時の標題「郭公あるいは青い森」。初出詞書「マックス・エルンスト FIAT MODES PEREAT ARS展に寄せて」。
- 58 葛飾哀歌(かつしかあいか) [18-19]  
 川下る舟の灯にかかる青けむり  
 6行▽詩集《昏睡季節》(草蟬舎刊) 1940年10月10日、一八ページ、本文9ポ1段組▼①昏睡季節・15
- 59 寿星(カノプス)(カノプス) [660-665]  
 「海山の傾斜や」  
 5節78行▽《海燕》(福武書店発行) 1986年1月号(5巻1号) 一六～一九ページ、本文9ポ24行1段組▼⑩ムーンドロップ・8

## 60 壁掛 (かべかけ) [583-584]

娘たちは遊んでいる

24行▽〈大竹茂夫展〉パンフレット(青木画廊)1982年3月27日、〔二ページ〕、本文14級1段組▼⑩薬玉・5

## 61 狩られる女——ミロの絵から(かられるおんな ミロのえから) [173-174]

偶然の配色の緑や黄のもやから

26行▽《詩学》(詩学社発行)1961年5月号(16巻6号)四六ページ、本文9ポ2段組▼⑤紡錘形・18

## 62 乾いた婚姻図(かわいたこんいんず) [37]

花やピストルも

13行▽詩集《液体》(草蟬舎刊)1941年12月10日、一五ページ、本文五号1段組▼②液体・13

## 63 感傷(かんしょう) [121-127]

鑑戸をおろす

6節99行▽詩集《僧侶》(書肆ユリイカ刊)1958年11月20日、六四〜七三ページ、本文五号27字詰13行1段組▼④僧侶・18

◆執筆は1958年。吉岡は同年8月8日の日記に「〈感傷〉出来。これで詩集《僧侶》の十九篇完成」と書いている。

## 64 甘露(かんろ) [615-619]

乳母が帰ってくる

4節68行▽《すばる》(集英社発行)1983年1月号(5巻1号)二八〜三二ページ、本文10ポ18行1段組▼⑩薬玉・14

◆註記「\*引用句はおもにフレイザー《金枝篇》永橋卓介訳を借用した。」

## 65 樹(き) [63-64]

雨のぬらした藁の寝床から

16行▽詩集《静物》(私家版刊)1955年8月20日、二〇〜二一ページ、本文五号11行1段組▼③静物・6

## 66 喜劇(きげき) [91-92]

台所の隅で 背中を裂かれた卵が泛び上る 長い夜の岸に近

21行分▽《詩学》(詩学社発行)1956年5月号(11巻6号)五三ページ、本文9ポ23字詰15行2段組▼④僧侶・1

## 67 寄港(きこう) [174-175]

ぼくの肉体の延長がつづく うごき廻る火や女の尾冠の頂へ

19行分▽《秩序》(文学グループ秩序発行)1961年7月(9号)六六〜六七ページ、本文五号24字詰1段組▼⑤紡錘形・19

## ◆初出末尾「1961・4・14」。

## 68 紀行(きこう) [557-558]

胡桃のように

18行▽《旅》(日本交通公社発行)1977年8月号(51巻8号)一四〇ページ〈今月の詩〉、本文20級ゴチック体1段組▼⑩ポール・クレーの食卓・16

◆初出「水納島(沖縄)'76「旅」写真コンテスト最優秀作品 カメラ 三管正勝」。

## 69 狐(きつね) [485-486]

人の心のうごきは謎

17行▽《文学界》(文藝春秋発行)1978年1月号(32巻1号)九ページ、本文9ポ1段組(コラム〈扉の詩〉)▼⑨夏の宴・15

◆初出カットは伊庭新太郎。

## 70 銀鮫(キメラ・ファンタスマ)(キメラファンタスマ) [700-707]

(枕もとへ

6節112行▽《ユリイカ》(青土社発行)1988年6月臨時増刊号(20巻7号)四八〜五三ページ、本文9ポ24行1段組▼⑩ムーンドロップ・17

◆初出に詞書「澁澤龍彦鎮魂詩篇」なし。註記「\*澁澤龍彦とその知己たちの言葉を引用している。」

## 71 休息(きゅうそく) [731-733]

隣家の主婦がいそいそと

38行▽《現代詩手帖》(思潮社発行)1987年9月号(30巻9号)一四〜一五ページ〈澁澤龍彦追悼〉、本文9ポ23行1段組▼未刊詩篇・18

◆初出註記「\*澁澤龍彦と土方巽の言葉を引用している。」

## 72 求肥(ぎゅうひ) [622-624]

わたしが子供であった頃

30行▽《花神》(花神社発行)1983年9月(秋・3巻3号)二〜三ページ、本文五号17行1段組▼⑩薬玉・16

## 73 霧(きり) [546-547]

案内図がある

13行▽《讀賣新聞〔夕刊〕》(読売新聞社発行)1961年10月5日(30512号)五面、本文新聞活字一倍扁平1段組▼⑩ポール・クレーの食卓・7

◆初出は村野四郎〈現代詩のわかりにくさ——それは精神文化の流れとともにある〉の文中に野囲みで掲載。

## 74 桐の花(きりのはな) [19]

白紙のうらにうつすらと哀しみわく午後

3行▽詩集《昏睡季節》(草蟬舎刊)1940年10月10日、一九ページ、本文9ポ1段組▼①昏睡

季節・16

75 金柑譚（きんかんたん）[491-496]

大股で駆けつつ

5節84行▽《海》（中央公論社発行）1979年5月号（11巻5号）三二～三五ページ、本文9ポ26行1段組▼⑨夏の宴・17

◆初版では「1」の16行めと17行めの間、「4」の15行めと16行めの間（初出ではいずれもページのノドにかかっているが、行アキなし）に1行アキがあったが、二版で修正された。

76 銀幕（ぎんまく）[665-667]

場末の映画館の夏の終り

39行▽梅木英治銅版画集《日々の惑星》（ギャラリープチフォルム刊）1986年12月3日、本文1段組▼⑩ムーンドロップ・9

77 苦力（クーリー）[112-114]

支那の男は走る馬の下で眠る

39行▽《現代詩》（書肆パトリア発行）1958年6月号（5巻6号）九二～九三ページ、本文9ポ20行1段組▼④僧侶・13

78 寓話（ぐうわ）[80-82]

肉屋の千匹の蠅とび終り 庖丁刃物の類は 仮設の暗がりから あとずさりして 一段と深い世界へ沈みゆき

18行▽詩集《静物》（私家版刊）1955年8月20日、五六～五九ページ、本文五号25字詰11行1段組▼③静物・15

◆自筆原稿末尾に「一九五五・三・五。」と《静物》の稿本中、唯一脱稿日らしき記述がある。

79 九月（くがつ）[549-550]

岩棚が見える

23行▽《北海道新聞〔夕刊〕》（北海道新聞社発行）1964年9月7日（7930号）五面、本文新聞活字一倍扁平1段組▼⑩ポール・クレーの食卓・10

◆初出「え・田畔<sup>たぐみしろう</sup>司朗」。

80 草の迷宮（くさのめいきゅう）[459-465]

「狼の鳴声や

6節100行▽《池田満寿夫20年の全貌》（美術出版社刊）1977年11月3日、一一八～一一九ページ、本文16級35行2段組▼⑨夏の宴・9

◆題辞「〈目は時と共に静止する〉池田満寿夫」。

81 薬玉（くすだま）[599-603]

菊の花薫る垣の内では

2節80行▽《海燕》（福武書店発行）1982年4月号（1巻4号）一六～一九ページ、本文9ポ22行1段組▼⑩薬玉・10

◆初出時の標題「薬玉」。

82 果物の終り（くだもののおわり）[143-146]

つねに死ぬ人のまわりにある羽毛の潮のながれ

57行▽《同時代》（黒の会発行）1959年6月（9号）二三～二六ページ、本文9ポ19行1段組▼⑤紡錘形・2

83 示影針（グノーモン）（グノーモン）[407-412]

「少女は消え失せ

5節79行▽《ユリイカ》（青土社発行）1975年9月号（7巻8号）一〇四～一〇八ページ、本文9ポ22行1段組▼⑧サフラン摘み・27

◆詞書「澁澤龍彦のマイクロコスモス」。註記「\*示影針=日時計のこと」。

84 首長族の病氣（くびながぞくのびょうき）[161-162]

或る新聞記事で首長族のことを改めて知った いまでもビル

22行分▽《鰐》（書肆ユリイカ発行）1959年11月（4号）六～七ページ、本文五号25字詰1段組▼⑤紡錘形・11

◆吉岡がクリアファイルに保存していた新聞の切り抜きに、本篇のスルスと思しい記事がある。

85 雲井（くもい）[735-738]

（とろとろと眠りこむ

3節47行▽《鷹》（鷹俳句会発行）1989年10月号（26巻10号）四六～四九ページ、本文五号14行1段組▼未刊詩篇・20

◆初出註記「\*瀧口修造そのほかの章句を引用している。」

86 劇のためのト書の試み（げきのためのトがきのこころみ）[185-187]

それまでは普通のサイズ

39行▽《鰐》（鰐の会発行）1962年9月（10号）二～三ページ、本文五号20行1段組▼⑥静かな家・1

87 下痢（げり）[147-148]

ぼくは下痢する のぞむところでなく 拒む術もなく 歴史

24行分▽《鰐》（書肆ユリイカ発行）1959年8月（1号）八～九ページ、本文9ポ25字詰1段組▼⑤紡錘形・3

88 幻場（げんじょう）[474-476]

大通りに

38行▽《月下の一群》（海潮社発行）1976年12月（冬・2号）特集〈幻獣 Imaginary Beings〉四〇～四一ページ、本文9ポ30行1段組▼⑨夏の宴・13

89 恋する絵（こいするえ）[224-226]

造る生活



42行▽《現代詩手帖》(思潮社発行)1967年2月号(10巻2号)二八~二九ページ、本文五号1段組▼⑥静かな家・15

## 90 珈琲(コーヒー)[190-191]

わたしは発見し

10行▽《美術手帖》(美術出版社発行)1963年2月号(216号)七五ページ、本文8ポ1段組▼⑥静かな家・3

◆初出「絵・加山又造」。

## 91 告白(こくはく)[92-93]

わたしは知らないことは 他の人に告げぬ また他の人の声

16行分▽《新詩集》(蜂の会発行)1956年4月(3号)三一ページ、本文8ポ24字詰16行2段組▼④僧侶・2

## 92 固形(こけい)[109-110]

ぼくの偏見は多くの人をこまらす ときに植物の茎という茎

24行分▽《現代詩》(書肆パトリア発行)1957年10月号(4巻10号)三四~三五ページ、本文9ポ25字詰18行1段組▼④僧侶・11

## 93 午睡(ごすい)[50]

水平線へ体温計をつみかさねる

10行▽詩集《液体》(草蟬舎刊)1941年12月10日、三二ページ、本文五号1段組▼②液体・28

## 94 東風(こち)[619-622]

地表すれすれに

51行▽《をがたま》(をがたまの会発行)1983年2月(冬・8号)二~五ページ、本文五号15行1段組▼⑩葉玉・15

◆初出目次・本文の作者名は「吉岡實」。

## 95 孤独(こどく)[34]

封角線の蠟燭くずれて

4行▽詩集《液体》(草蟬舎刊)1941年12月10日、一一ページ、本文五号1段組▼②液体・9

## 96 孤独なオートバイ(こどくなオートバイ)[218-223]

海岸の砂地より少し高い平面を

102行▽《三田文学》(三田文学会発行)1966年11月号(53巻4号)三五~三九ページ、本文10ポ21行1段組▼⑥静かな家・14

## 97 子供の儀礼(こどものぎれい)[441-445]

わたしはチョークで黒板に描く

56行▽《文藝》(河出書房新社発行)1976年10月号(15巻10号)一六八~一七一ページ、本

文9ポ22行1段組▼⑨夏の宴・4

◆初出本文カットは野中ユリ。

## 98 この世の夏(このよのなつ)[518-519]

「孔子は歩いて杉林に入り」

20行▽《朝日新聞〔夕刊〕》(朝日新聞東京本社発行)1979年8月20日(33641号)三面、本文7.5ポ1段組▼⑨夏の宴・24

◆初出「木口木版・小林敬生」。

## 99 コレラ(コレラ)[296-301]

戦争を考える

97行▽《都市》(都市出版社発行)1969年12月(1号)五〇~五一ページ、本文9ポ25行2段組▼⑦神秘的な時代の詩・18

◆初出末尾「〈一九六九・一〇・五〉」。

## 100 昏睡季節1(こんすいきせついち)[21]

水の梯子を

7行▽詩集《昏睡季節》(草蟬舎刊)1940年10月10日、二二ページ、本文9ポ1段組▼①昏睡季節・19

## 101 昏睡季節2(こんすいきせつに)[22]

牛乳の空罎の中に

9行▽詩集《昏睡季節》(草蟬舎刊)1940年10月10日、二三ページ、本文9ポ1段組▼①昏睡季節・20

## 102 崑崙(こんろん)[255-263]

では未経験的なピンクの空間へ

147行▽《南北》(南北社発行)1968年10月号(3巻10号)六~一三ページ、本文10ポ四分アキ20行1段組▼⑦神秘的な時代の詩・8

◆初出目次に「長詩」とある。

## さ 行

## 103 サーカス(サーカス)[537-539]

小さな街には小さな火事があり

45行▽《實存主義》(理想社発行)1958年9月(15号)三〇~三三ページ、本文五号12行1段組▼⑩ボール・クレーの食卓・2

## 104 歳月(さいげつ)[12-13]

盲縞に昏れゆく眼瞼のうらで

4行▽詩集《昏睡季節》(草蟬舎刊)1940年10月10日、九ページ、本文9ポ1段組▼①昏睡季節・7

## 105 サイレント・あるいは鮭(サイレント あるいはさけ) [400-402]

薄明の山の川を遡る

41行▽《現代詩手帖》(思潮社発行)1975年1月号(18巻1号)一〇〜一一ページ、本文9ポ25行1段組▼⑧サフラン摘み・25

◆詞書「芦川羊子の演舞する〈サイレン鮭<sup>じやけ</sup>〉に寄せる」。

## 106 沙庭(さにわ) [738-739]

灯明のともる

20行▽《文學界》(文藝春秋発行)1990年1月号(44巻1号)九ページ、本文9ポ22行1段組(コラム〈扉の詩〉)▼未刊詩篇・21

## 107 サフラン摘み(サフランつみ) [305-307]

クレタの或る王宮の壁に

42行▽《現代詩手帖》(思潮社発行)1973年7月号(16巻7号)二六〜二七ページ、本文9ポ25行1段組▼⑧サフラン摘み・1

◆目次の作者名は「吉岡實」。

## 108 猿(さる) [562-563]

「父の手のうえに乗る

20行▽《讀賣新聞〔夕刊〕》(読売新聞社発行)1980年1月25日(37177号)九面、本文7.5ポ1段組▼⑩ボール・クレアの食卓・20

## 109 讃歌(さんか) [72-73]

ぼくには拵(が)りが必要だ

34行▽詩集《静物》(私家版刊)1955年8月20日、三八〜四一ページ、本文五号11行1段組▼③静物・11

## 110 三重奏(さんじゅうそう) [292-295]

わたしは自分の描いた絵を

71行▽《本の手帖》(昭森社発行)1969年2・3月号(9巻2号)七〇〜七三ページ、本文9ポ23行1段組▼⑦神秘的な時代の詩・17

## 111 塩と藻の岸べで(しおどものきしべで) [548-549]

雨後の首府

22行▽《花椿》(資生堂出版部発行)1962年6月(7月号・13巻6号)五ページ、本文9ポ1段組▼⑩ボール・クレアの食卓・9

◆初出「画・脇田和」。

## 112 色彩の内部(しきさいのないぶ) [244-246]

涼しい鈴懸の下の

42行▽《the high school life》(MAC発行)1968年8月(15号)一〇面(コラムくえるまふろじつとのうた)、本文新聞活字一倍扁平1段組▼⑦神秘的な時代の詩・4

## 113 仕事(しごと) [94-95]

荷揚げは雨だ

20行▽《今日》(書肆ユリイカ発行)1956年12月(6号)八ページ、本文9ポ13行2段組▼④僧侶・4

◆初出末尾「一九五六・九・一五」。

## 114 死児(しじ) [127-138]

大きなよだれかけの上に死児はいる

Ⅷ節189行▽《ユリイカ》(書肆ユリイカ発行)1958年7月号(3巻7号)二八〜三八ページ、本文9ポ22行1段組▼④僧侶・19

## 115 使者(ししゃ) [496-500]

白い塩の山をふた廻りして

6節67行▽《新劇》(白水社発行)1977年8月号(24巻8号)一〇〜一三ページ、本文12級21行1段組▼⑨夏の宴・18

◆詞書「笠井叡のための素描の詩」。初出に笠井の〈黄泉比良坂〉(1975年、目黒公会堂)〔写真：金英沫〕と芦川羊子の〈ひとがた〉(1976年、アスベスト館)〔写真：山口晴久〕の舞台写真各1点を掲載。

## 116 静かな家(しずかないえ) [226-229]

パセリの葉のみどりの

52行▽《現代詩手帖》(思潮社発行)1966年4月号(9巻4号)三八〜四〇ページ、本文五号21行1段組▼⑥静かな家・16

## 117 七月(しちがつ) [14]

氷菓子はとけて

6行▽詩集《昏睡季節》(草蟬舎刊)1940年10月10日、一一ページ、本文9ポ1段組▼①昏睡季節・9

## 118 失題(しつだい) [32]

病犬の瞳孔を

9行▽詩集《液体》(草蟬舎刊)1941年12月10日、九ページ、本文五号1段組▼②液体・7

## 119 自転車の上の猫(じてんしゃのうえのねこ) [361-362]

闇の夜を疾走する

18行▽〈松井喜三男展「少年少女」〉パンフレット(青木画廊)1974年4月13日、本文10ポ18行1段組▼⑧サフラン摘み・15

◆初出詞書「マツイ・キミオの絵によせて」。

## 120 島 (しま) [93-94]

島へ上り 男は岩角でみつめる 獣や魚の大きな弓なりの骨  
13行分▽《新詩集》(蜂の会発行)1956年11月(4号)四九ページ、本文8ポ24字詰16行2段組▼④僧侶・3

## 121 ジャングル (ジャングル) [76-78]

木が茂る 実は熟れる 茂るまま枯れる  
21行▽詩集《静物》(私家版刊)1955年8月20日、四八～五〇ページ、本文五号24字詰・25字詰11行1段組▼③静物・13  
◆初出は、四八～四九ページが24字詰で、五〇ページが25字詰で折り返し。同書四八～四九ページ以外は25字詰で折り返してあることから、24字詰は組版上の不統一と考えられる。

## 122 秋思賦 (しゅうしふ) [594-596]

かの夏の終りに  
39行▽《ユリイカ》(青土社発行)1982年12月臨時増刊号(14巻13号)二八～三〇ページ、本文9ポ22行1段組▼⑩薬玉・8  
◆4行めから11行めまでは、〈断想〉(●175)全行を変改吸収。

## 123 修正と省略 (しゅうせいとしょうりやく) [179-181]

装飾模様に用いられたらしい わたしの統一体としての人間  
26行分▽《文藝》(河出書房新社発行)1962年3月号(1巻1号)二四二～二四三ページ、本文10ポ26字詰1段組▼⑤紡錘形・22

## 124 呪婚歌 (じゅこんか) [155-159]

わたしたちの今夜というこの時  
70行▽《ユリイカ》(書肆ユリイカ発行)1959年10月号(4巻10号)二四～二七ページ、本文9ポ21行1段組▼⑤紡錘形・9  
◆初出に題辞「われら今夜というこの時／この黄教の馬の放中せる陰茎を／中心にして／雨の地に拝跪した／〈ラマ僧の呪禱より〉」。

## 125 受難 (じゆなん) [171-172]

雪の下にねむる釘  
20行▽《近代文学》(近代文学社発行)1961年1月号(16巻1号)一〇〇ページ、本文9ポ1段組▼⑤紡錘形・17

## 126 豎の声 (しゆのこえ) [571-574]

「心は閑かにして 目を遠く見よ」  
35行▽《現代詩手帖》(思潮社発行)1981年9月号(24巻9号)二〇～二二ページ、本文9ポ23行1段組▼⑩薬玉・2  
◆初出時の標題「豎しゆの声」。註記「\*世阿弥の伝書にある「横おうノ声」(明るく外向的で強い声)。「豎しゆノ声」(内向的でやわらかく細かに暗い感じの声)＝観世寿夫の解説。」

## 127 春思賦 (しゅんしふ) [604-606]

女の子が生まれた  
41行▽《現代詩手帖》(思潮社発行)1983年1月号(26巻1号)一四～一五ページ、本文9ポ25行1段組▼⑩薬玉・11

## 128 巡礼 (じゅんれい) [587-594]

廊下で二人の女とすれちがった  
8節112行▽《ユリイカ》(青土社発行)1981年11月臨時増刊号(13巻14号)一〇～一五ページ、本文9ポ22行1段組▼⑩薬玉・7  
◆初出時に節の数字はなく、一行アキ。

## 129 唱歌 (しょうか) [542-543]

男は不足なものをさがす  
17行▽《朝日新聞》(朝日新聞東京本社発行)1959年7月26日(26404号)一七面、本文新聞活字一倍扁平▼⑩ポール・クレーの食卓・4  
◆初出時の標題「牧歌」。初出「え 南大路みなみちみち一」。

## ●130 小曲 (しょうきょく) [—]

眼のままで  
20行▽《Mainichi Daily News》(毎日新聞社発行)1984年9月17日(22128号)九面の〈20:20—20 Poems by 20 Poets in 20 Lines〉、本文9ポ22行1段組▼〈聖童子譚〉(153)に変改吸収  
◆初出時〈Shookyoku〉(本文のローマ字表記)と〈A Short Piece of Music〉(Roger Pulversによる英訳)を付す。

## 131 少女 (しょうじょ) [247-249]

客観的状况で  
42行▽《血と薔薇》(天声出版発行)1969年1月(2号)一四～一五ページ、本文9ポ24行1段組▼⑦神秘的な時代の詩・5

## 132 少年 (しょうねん) [413-417]

蝶や蜜蜂のように  
6節52行▽《饗宴》(書肆林檎屋発行)1976年5月(春・1号)二～六ページ、本文は旧字新かな(ひらがなの拗促音は並字)使用、12ポ15行1段組▼⑧サフラン摘み・29  
◆初出の漢字の旧字使用とひらがなの拗促音の並字表記は、他の掲載詩篇を見ても明らかのように、《饗宴》誌の編集方針と考えられる。

## ●133 少年 あるいは秋 (しょうねん あるいはあき) [—]

ぼくは(父)を憎んでいるようだ  
14行▽《別冊婦人公論》(中央公論社発行)1984年10月(秋・5巻4号)三七三ページ、本文9ポ18行1段組▼〈聖童子譚〉(153)に変改吸収

## 134 蒸発（じょうはつ）[30-31]

聖母祭の樹の下を発車する

9行▽詩集《液体》（草蟬舎刊）1941年12月10日、七ページ、本文五号1段組▼②液体・5

## 135 〔食母〕頌（しょくぼしょう）[709-714]

〔泣き女〕がめぞめそと

4節74行▽《中央公論文芸特集》（中央公論社発行）1988年9月（秋季・5巻3号）七八～八十一ページ、本文10ポ22行1段組▼②ムードロップ・19

◆初出末尾「（一九八八・八・八）。初出誌巻末の〈編集後記〉に「☆〔食母〕という言葉が拓くイメージ。吉岡実氏の詩は御自身が最後の、と言われる作品です。」（E〔編集担当の江阪満か〕）とある。

## 136 叙景（じょけい）[673-675]

「あの時

36行▽《現代詩手帖》（思潮社発行）1986年8月号（29巻8号）三〇～三十一ページ、本文五号22行1段組▼②ムードロップ・11

◆単行詩集の初出一覧には「(改作)」と記されている。

## 137 序詩（じょし）[一]

うんすんかるたを想起させる

3行▽寺田澄史作品集《がれうた航海記——*The Verses of the St. Scarabeus*》（俳句評論社刊）1969年5月15日▼未刊詩篇・13

## 138 序詩（じょし）[一]

白地へ白く白鳥類は帰る

2行▽志摩聰句帖《白鳥幻想》（俳句評論社刊）1969年6月1日、八ページ、本文9ポ四分アキ1段組▼未刊詩篇・14

◆初出は対向の九ページにイラスト。「飾画：大沢一佐志」。

## 139 人工花園（じんこうかえん）[560-562]

農家の納屋に人々はどのようにして最初に入らな

\*印で4節に分かつ40行▽第一回三人展記念《ALICE IN FLOWERLAND——花の国のアリス》（未生流中山文甫会刊）1976年2月4日、一〇四～一〇七ページ、本文12ポ13行1段組▼⑩ポール・クレーの食卓・19

## 140 神秘的な時代の詩（しんぴてきなじだいのし）[268-274]

走っている電車のなかで

103行▽《季刊藝術》（季刊藝術出版発行）1968年10月（秋・2巻4号）一一六～一一九ページ、本文9ポ27行1段組▼⑦神秘的な時代の詩・11

## 141 スイカ・視覚的な夏（スイカ しかくてきななつ）[553]

スイカを割る

15行▽《讀賣新聞〔夕刊〕》（読売新聞社発行）1968年8月19日（33015号）七面〈八月のうた〉、本文新聞活字一倍扁平1段組▼⑩ポール・クレーの食卓・13  
◆初出「写真・橋本彰禧記者」。

## 142 睡蓮（すいれん）[688-691]

池面の水の襞はきらめく

3節64行▽《海燕》（福武書店発行）1987年11月号（6巻11号）一八～二二ページ、本文9ポ23行1段組▼②ムードロップ・13

◆註記「\*宇野邦一その他の章句を引用している。」

## 143 スープはさめる（スープはさめる）[207-209]

紅紫のヒースの荒野へ

37行▽《詩と批評》（昭森社発行）1966年5月号（1巻1号）二〇～二二ページ、本文五号21行1段組▼⑥静かな家・11

## 144 スワンベルグの歌（スワンベルグのうた）[725-727]

ものの成熟について

34行▽《婦人公論》（中央公論社発行）1969年2月号（54巻2号）〔PETIT PETIT（プチプチ）のコーナー、二二〇～二二二ページ〕〈MY POESY まい・ぼえじい・2〉、本文8ポ20行1段組（スミ・アカの2色刷）▼未刊詩篇・12

◆初出「イラスト・前田常作」。初出註記「\*スワンベルグ〔以下なし〕」。《ユリイカ》（青土社発行）1973年9月号（5巻10号）の〈吉岡実新詩集 神秘的な時代の詩・抄〉（本文8ポ26行2段組）に改稿再録、末尾「註記／詩集『神秘的な時代の詩』は、ここに掲載された作品のほかに、すでに思潮社版『現代詩文庫14・吉岡実詩集』に収められている「マクロコスモス」「フォーク・ソング」「夏から秋まで」「立体」および、現代詩手帖に発表された「わが馬ニコルスの思い出」などを含み、湯川書房より刊行される予定である。」

## 145 聖あんま語彙篇（せいあんまごいへん）[329-334]

わたしは見たんだぞっ！

4節87行▽《美術手帖》（美術出版社発行）1973年2月号（364号）一五一～一五二ページ、本文8ポ24行3段組▼⑧サフラン摘み・8

◆題辞「〈馬を鋸で挽きたくなる〉 土方 巽」。初出末尾「（正月・七草）」。

## 146 聖あんま断腸詩篇（せいあんまだんちょうしへん）[675-687]

「この狂おしい

〔I 物質の悲鳴〕〔II メソッド〕〔III テキスト〕◆註記「暗黒舞踏のフェスティバル「舞踏懺悔録集成」における、講演のためのテキストをつくる時、私は『日本霊異記』を参考にした。それを拾い読みしていて、この章句を見つけた。古代から「母子相姦」の悲劇があり、それはこれからも、永遠に続くことだろう。——（H）〔IV 故園追憶〕〔V（衰弱体の採集）〕〔VI 挽歌〕◆〈反歌〉あり。〔VII 像と石文〕〔VIII 慈悲心鳥〕196行▽《新潮》（新潮社発行）1986年6月号（83巻6号）二二〇～二三〇ページ〈長篇詩——土方巽追悼〉、本文9ポ23行1段組。▼⑩ムードロップ・12

◆題辞「〈神の光を臨終している〉——土方巽」。註記「\*この作品は、おもに土方巽の言葉の引用で構成されている。また彼の友人たちの言葉も若干、補助的に使わせて貰っている。なお冒頭のエピグラムは、彼の辞世である。」

147 青海波（せいがいほ）[633-638]

模造マホガニーの長椅子にねて

4節84行▽《海》(中央公論社発行)1983年6月号(15巻6号)二二～二五ページ、本文9ポ26行1段組▼⑩薬玉・19

148 聖家族（せいかぞく）[115-116]

美しい水を刻み

21行▽《季節》(二元社発行)1958年7月号(11号)二二～二三ページ、本文9ポ16行1段組▼④僧侶・14

149 青枝篇（せいしへん）[576-582]

雨乞いの儀式とはなに

[Ⅰ 地の霊] [Ⅱ 水の夢] [Ⅲ 火の狼] [Ⅳ 風の華] 116行▽《日本経済新聞》(日本経済新聞社発行)1982年3月7日・14日・21日・28日(34638号二四面・34645号二四面・34652号二四面・34658号二四面)連載の〈三月の詩Ⅰ～Ⅳ〉、本文7.5ポ1段組▼⑩薬玉・4

◆初出時の標題・行数は「地の霊(春の伝説1)」・27行、「水の夢(春の伝説2)」・29行、「火の狼(春の伝説3)」・29行、「空の華(春の伝説4)」・29行。

150 聖少女（せいしょうじょ）[267-268]

少女こそぼくらの仮想の敵だよ！

22行▽《小説新潮》(新潮社発行)1969年11月号(23巻11号)一七六～一七七ページ、本文9ポ13行1段組(コラム)▼⑦神秘的な時代の詩・10

151 生誕（せいたん）[336-337]

横板の上に支那服の上半身をのぞかせ

19行▽《読賣新聞》(読売新聞社発行)1974年3月24日(35051号)二三面、本文8ポ1段組▼⑧サフラン摘み・10

◆初出「エッチング・出岡実」。

152 生徒（せいと）[559]

木造の古い小学校の便所の暗がり

5行▽〈片山健個展〉リーフレット(かんらん舎)1979年9月10日、(二～三ページ)、本文7ポ1段組▼⑩ポール・クレーの食卓・18

◆初出時標題なし。初出に絵・片山健「『美しい日々』より1969」。

153 聖童子譚（せいどうじたん）[648-653]

ぼくは(父)を憎んでいるようだ

[1 夏][2 秋][3 冬][4 春]83行▽《ユリイカ》(青土社発行)1984年12月臨時増刊号(16

巻14号)一六～二〇ページ、本文9ポ22行1段組▼⑩ムーンドロップ・4

◆初出註記に「\*(1)は別冊「婦人公論」、(2)は「英文毎日ニュース」に発表したものである。」とあるように〈少年 あるいは秋〉(●133)と〈小曲〉(●130)のそれぞれ全行を変改吸収。

154 静物（せいぶつ）[38-39]

鶯鳥の頸ねむく

4行▽詩集《液体》(草蟬舎刊)1941年12月10日、一七ページ、本文五号1段組▼②液体・15

155 静物（せいぶつ）[57-58]

夜の器の硬い面の内で

21行▽詩集《静物》(私家版刊)1955年8月20日、六～八ページ、本文五号11行1段組▼③静物・1

◆《静物》の冒頭は初刊以来、一貫して〈静物〉(155)で、吉岡の手になる稿本でも最初の作品として製本されているが、印刷所に渡った段階では〈静物〉連作の二番めに置かれていた。吉岡は詩集の校正段階のある時点で、本詩篇こそ巻頭詩篇にふさわしいと断を下した。

156 静物（せいぶつ）[58-59]

夜はいっそう遠巻きにする

13行▽詩集《静物》(私家版刊)1955年8月20日、一〇～一一ページ、本文五号11行1段組▼③静物・2

◆稿本で当初、中扉のすぐあとに置かれていた〈静物〉(156)が印刷入稿時における《静物》の巻頭詩篇だった。稿本での本篇の第一行は「非在[もしくは「非存」、二文字めは「土」「子」どちらかを先に書いて上書きしている]の鏡」とあったのを赤線で抹消してある。

157 静物（せいぶつ）[59-60]

酒のない瓶の内の

15行▽詩集《静物》(私家版刊)1955年8月20日、一二～一三ページ、本文五号11行1段組▼③静物・3

158 静物（せいぶつ）[60-61]

台所の汚れた塩

21行▽詩集《静物》(私家版刊)1955年8月20日、一四～一六ページ、本文五号11行1段組▼③静物・4

159 聖母頌（せいぼしょう）[195-197]

わたしたち再びうまれるとしたら

29行▽《郵政》(郵政弘済会発行)1964年7月号(16巻7号)一四～一五ページ、本文9ポ25行1段組▼⑥静かな家・6

160 蟬（せみ）[439-441]

「一匹の蜂がブーンと飛びまわっている」

40行▽《ユリイカ》(青土社発行)1978年7月号(10巻8号)一二～一三ページ、本文9ポ23

行1段組▼⑨夏の宴・3

161 草上の晩餐（そうじょうのばんさん）[351-352]

ヒンズー教寺院の庭を巡り歩く

34行▽《現代詩手帖》（思潮社発行）1974年4月号（17巻4号）八～九ページ、本文9ボ1段組▼⑧サフラン摘み・13

162 相聞歌（そうもんか）[35-36]

白い橋で 病める女の あしうらに

12行〔2行は〈反歌〉〕▽詩集《液体》（草蟬舎刊）1941年12月10日、一三ページ、本文五号1段組▼②液体・11

163 僧侶（そうりょ）[100-105]

四人の僧侶

9節84行▽《ユリイカ》（書肆ユリイカ発行）1957年4月号（2巻4号）三七～四一ページ、本文9ボ22行1段組▼④僧侶・8

164 即興詩（そっきょうし）[717-718]

私ノ時計ニ

7行▽《新思潮〔第14次〕》（玄文社発行）1947年9月（1巻2号）二五ページ、本文五号二分アキ11行1段組▼未刊詩篇・3

◆《吉岡実全詩集》で第一行が献辞のように組まれているのは誤り。

165 ゾンネンシュターンの船（ゾンネンシュターンのふね）[394-399]

「罪深い魚は泳ぐ方角をまちがえている」

5節89行▽《ユリイカ》（青土社発行）1974年12月臨時増刊号（6巻15号）四六～五一ページ、本文10ボ26行1段組▼⑧サフラン摘み・24

◆初出註記「註 ゾンネンシュターンは「幻視者」といわれる異端の老人画家。カッコの中の引用句は、同展覧会目録より借用した。」

## た 行

166 滞在（たいざい）[197-198]

わたしはいつも考える

25行▽《現代詩手帖》（思潮社発行）1964年4月号（7巻4号）八～九ページ、本文五号1段組▼⑥静かな家・7

167 タコ（タコ）[307-309]

火をへだてて呼びかける

\*印が3節を従える34行▽《ユリイカ》（青土社発行）1972年10月臨時増刊号（4巻12号）

一二～一四ページ、本文10ボ25字詰1段組▼⑧サフラン摘み・2

168 舵手の書（だしゆのしょ）[387-392]

雨は

6節76行▽《現代詩手帖》（思潮社発行）1974年10月臨時増刊号（17巻11号）八八～九一ページ、本文9ボ25行1段組▼⑧サフラン摘み・22

◆献辞「瀧口修造氏に」。

169 卵（たまご）[64]

神も不在の時

12行▽詩集《静物》（私家版刊）1955年8月20日、二二～二三ページ、本文五号11行1段組▼③静物・7

170 垂乳根（たらちね）[606-610]

風のとおりる夏の座敷で

75行▽《海燕》（福武書店発行）1982年10月号（1巻10号）一八～二一ページ、本文9ボ22行1段組▼⑩薬玉・12

◆初出誌は表紙に標題・執筆者名とともに本文を14行近く掲載。

171 単純（たんじゅん）[106-107]

警戒もされずにその男は死んだ 尾骶骨のいちじるしく突起

22行分▽《今日》（書肆ユリイカ発行）1957年6月（8号）三〇ページ、本文9ボ25字詰15行2段組▼④僧侶・9

172 誕生（たんじょう）[36]

母胎が氷結する早晨

4行▽詩集《液体》（草蟬舎刊）1941年12月10日、一四ページ、本文五号1段組▼②液体・12

173 断章（だんしょう）[18]

わがころになやみはず

2行▽詩集《昏睡季節》（草蟬舎刊）1940年10月10日、一七ページ、本文9ボ1段組▼①昏睡季節・14

174 断章（だんしょう）[一]

永劫に舟の去りゆく

9行▽《水産》（東洋堂発行）1948年8月号（3巻8号）一ページ、本文五号二分アキ11行1段組▼未刊詩篇・5

◆詩篇を挿絵（クレジットなし）が囲む。

●175 断想（だんそう）[一]

むらさき色に手を染めあげ

8行▽《CURIEUX——求龍》（求龍堂発行）1978年11月（4号）一ページ、本文五号12行1

段組▼〈秋思賦〉(122)に変改吸収

◆初出「カット・勝本富士雄」。

176 父・あるいは夏(ちち あるいはなつ) [472-474]

「鱒の血の頭のそばを

35行▽《カイエ》(冬樹社発行)1978年8月号(1巻2号)二四～二五ページ、本文9ポ21行1段組▼⑨夏の宴・12

177 朝食(ちょうさん) [28-29]

指揮者の手に

11行▽詩集《液体》(草蟬舎刊)1941年12月10日、五ページ、本文五号1段組▼②液体・3

178 鎮魂歌(ちんこんか) [167-168]

ぼくは知っている

25行▽《風景》(悠々会発行)1961年2月号(2巻2号)一八～一九ページ、本文8ポ二分アキ1段組▼⑤紡錘形・15

179 ツグミ(ツグミ) [564-565]

横向きの女の細い首のすぐわきから

29行▽《蘭》(蘭発行所発行)1980年3月号(100号)二〇～二一ページ、本文9ポ17行1段組▼⑩ポール・クレーの食卓・21

180 低音(ていおん) [278-279]

ブランコのりの少女がひとり

23行▽《風景》(悠々会発行)1970年3月号(11巻3号)五八～五九ページ、本文10ポ16行1段組▼⑦神秘的な時代の詩・14

181 弟子(でし) [280-280]

それは違った意味に使われる

43行▽《無限》(政治公論社発行)1972年8月(29号)三八～三九ページ、本文20級22行1段組▼⑦神秘的な時代の詩・15

182 田園(でんえん) [353-361]

洗濯女のエプロンのかげで

12節134行▽《ユリイカ》(青土社発行)1973年9月号(5巻10号)六〇～六七ページ、本文9ポ24行1段組▼⑧サフラン摘み・14

183 天竺(てんじく) [597-599]

水籠くいなの啼く日

39行▽《毎日新聞〔夕刊〕》(毎日新聞東京本社発行)1982年8月16日(38200号)四面、本文新聞活字一倍扁平3段組▼⑩薬玉・9

◆初出「写真・佐々木正和」。

184 伝説(でんせつ) [96]

椅子の上から 跳びおりてゆく 猫の毛のなかの跣足 刹那

11行分▽詩集《僧侶》(書肆ユリイカ刊)1958年11月20日、一六～一七ページ、本文五号27字詰13行1段組▼④僧侶・5

◆執筆は1956年。

185 灯台にて(とうだいにて) [176-178]

ゆっくり煙が止る

33行▽《文學界》(文藝春秋新社発行)1961年10月号(15巻10号)一二六～一二七ページ、本文9ポ1段組▼⑤紡錘形・20

◆題辞「教授はいう〈異った生き方の苦しみ——〉」。

186 動物(どうぶつ) [381-382]

それは伝聞によると

29行▽《季刊俳句》(中央書院発行)1973年10月(1号)六六～六七ページ、本文五号17行1段組▼⑧サフラン摘み・20

◆初出目次に「〔招待席〕／詩」とある。

187 透明な花束(とうめいなはなたば) [40]

神の足跡へ傾斜してゆく

5行▽詩集《液体》(草蟬舎刊)1941年12月10日、二一ページ、本文五号1段組▼②液体・17

188 溶ける花(とけるはな) [29-30]

春の葉脈に神々が膨張している

10行▽詩集《液体》(草蟬舎刊)1941年12月10日、六ページ、本文五号1段組▼②液体・4

◆題辞「〈中村葉子に〉」。

189 灯る曲線(ともるきょくせん) [52]

廻転扉をゆるくおしたら剃刀が雲を

10行▽詩集《液体》(草蟬舎刊)1941年12月10日、三四ページ、本文五号1段組▼②液体・30

## な 行

190 内的な恋唄(ないてきなこいうた) [210-215]

殺人者のすきなストロベリージュース

95行▽《詩と批評》(昭森社発行)1967年1月号(2巻1号)二〇～二三ページ、本文五号13行2段組▼⑥静かな家・12

## 191 汀にて（なぎさにて）〔一〕

ひぐれのなぎさをわたしはあるいてみた

12行▽《水産》（東洋堂発行）1948年7月号（3巻7号）二六～二七ページ、本文9ポ15行1段組（コラム）▼未刊詩篇・4

◆作者名は「皚寧吉」。

## 192 謎の絵（なぞのえ）〔522-523〕

岸边に近く

17行▽《東京新聞〔夕刊〕》（中日新聞東京本社発行）1979年1月5日（13124号）七面、本文新聞活字一倍扁平1段組▼⑨夏の宴・26

## 193 夏（なつ）〔9〕

注射器の午前九時十二分

7行▽詩集《昏睡季節》（草蟬舎刊）1940年10月10日、四ページ、本文9ポ1段組▼①昏睡季節・2

## 194 夏（なつ）〔107-109〕

蠟びきの食物の類をみて歩く

32行▽《季節》（二元社発行）1957年10月（11月号・7号）六二～六三ページ、本文9ポ19行1段組▼④僧侶・10

◆献辞「Y・Wに」。吉岡の随想〈女へ捧げた三つの詩〉に依れば、Y・Wは和田陽子。

## 195 夏から秋まで（なつからあきまで）〔237-240〕

レインちゃん 黄色い舌をして

64行▽《文学者》（文学者発行所発行）1967年8月号（10巻8号）二〇～二三ページ、本文9ポ17行1段組▼⑦神秘的な時代の詩・2

◆初出詞書「池田満寿夫／銅版画展目録より」（初刊に詞書なく、三刊にあり）。

## 196 夏の家（なつのいえ）〔276-278〕

森の青葉の下に来て

39行▽《ユリイカ》（青土社発行）1969年8月号（1巻2号）七六～七七ページ、本文9ポ23行1段組▼⑦神秘的な時代の詩・13

## 197 夏の宴（なつのうたげ）〔503-510〕

草むらより

IV節120行▽《文藝》（河出書房新社発行）1978年10月号（17巻10号）二二〇～二二六ページ、本文9ポ22行1段組▼⑨夏の宴・20

◆献辞「西脇順三郎先生に」。

## 198 夏の絵（なつのえ）〔68-69〕

商港や浚渫船もこの夏は

28行▽詩集《静物》（私家版刊）1955年8月20日、三〇～三二ページ、本文五号11行1段組

## ▼③静物・9

## 199 波よ永遠に止め（なみよえいえんにとまれ）〔740-755〕

わたしは 二人の従者と一人の宣教師とともに

11節257行▽《ユリイカ》（書肆ユリイカ発行）1960年6月号（5巻6号）四八～五三ページ、本文8ポ30字詰25行2段組▼未刊詩篇・10

◆初出は目次の標題「波よ永遠に止まれ」、詞書「ヘディン〈中央アジア探検記〉より」、註記「（本稿より八十行を削除して〔一〕九六〇年五月一日NHKより放送）。《吉岡実詩集》（思潮社、1967年10月1日）に改稿再録（三一四～三三五ページ、本文9ポ27字詰14行1段組）。

## 200 雞（にわとり）〔569-571〕

松の梢のむこうの日の出

40行▽《朝日新聞》（朝日新聞東京本社発行）1981年1月3日（34131号）一五面、本文7.5ポ13行3段組▼⑩葉玉・1

◆初出時の標題「にわとり」。

## 201 沼・秋の絵（ぬま あきのえ）〔178-179〕

女がそこにひとりいる

23行▽《文藝》（河出書房新社発行）1962年3月号（1巻1号）二四〇～二四一ページ、本文10ポ1段組▼⑤紡錘形・21

## 202 野（の）〔511〕

「自然界は人間の俗界よりすぐれている」

12行▽《街頭詩の試み》（地下鉄千代田線明治神宮前駅ホーム壁面、パレフランス提供）1979年6月～8月の「第一期」、縦約130×横約165cmの額に掲げられた（未見）。▼⑨夏の宴・21

◆初出はその後、詩のアンソロジー《地下鉄のオルフェ》（オーデスク、1981年4月〔日記記載なし〕）に再録された（二四～二五ページ、本文12ポ11行1段組）。

## は 行

## 203 葉（は）〔312-319〕

モップの棒の立てかけてある

125行▽《ユリイカ》（青土社発行）1972年4月号（4巻4号）一一～一七ページ、本文9ポ24行1段組▼⑧サフラン摘み・4

◆初出註記「（連禱詩《粘土説》の一部）。初出目次には「連禱詩」とある。

## 204 灰色の手套（はいいろのしゅとう）〔47〕

いちめんひろがる白い雲

11行▽詩集《液体》（草蟬舎刊）1941年12月10日、二九ページ、本文五号1段組▼②液体・25



## 205 敗北（はいぼく）[717]

神の掌がひらかれたが

6行▽《新潮》〔第14次〕（玄文社発行）1947年9月（1巻2号）二四ページ、本文五号二分  
アキ11行1段組▼未刊詩篇・2

## 206 白昼消息（はくちゅうしょうそく）[14-15]

自転車競走選手が衝突する

6行▽詩集《昏睡季節》（草蟬舎刊）1940年10月10日、一二ページ、本文9ボ1段組▼①昏睡  
季節・10

## 207 薄荷（はっか）[655-658]

夏が過ぎ

4節50行▽《四谷シモン 人形愛》（美術出版社刊）1985年6月10日、九六ページ、本文13級3  
段組▼②ムードロップ・6

◆題辞「（人形は爆発する）——四谷シモン」。初出は対向ページ全面に、人形を描いた四谷  
シモンの銅版画を掲載。

## 208 花遅き日の歌（はなおそきひのうた）[43]

薬品罐のなかで朝をまとうた牝鹿の

10行▽詩集《液体》（草蟬舎刊）1941年12月10日、二五ページ、本文五号1段組▼②液体・  
21

## 209 花の肖像（はなのしょうぞう）[51]

温室ノ硝子ヘアツマル

10行▽詩集《液体》（草蟬舎刊）1941年12月10日、三三ページ、本文五号1段組▼②液体・  
29

## 210 花冷えの夜に（はなびえのよるに）[28]

涙線がきれて

6行▽詩集《液体》（草蟬舎刊）1941年12月10日、四ページ、本文五号1段組▼②液体・2

## 211 花・変形（はな へんけい）[554-555]

沼地の岸から戻ってくる

Ⅱ節18行▽《いけばな草月》（草月出版部発行）1966年5月（53号）三二ページ、本文9ボ〔漢  
字はゴチック体、かな・カナはアンチック体〕11行2段組▼⑩ポール・クレアの食卓・14

## 212 春（はる）[8]

朝は蝶の脚へ銀貨を吊す

10行▽詩集《昏睡季節》（草蟬舎刊）1940年10月10日、三ページ、本文9ボ1段組▼①昏睡  
季節・1

## 213 春の絵（はるのえ）[552]

梨の畑で

13行▽《讀賣新聞》（読売新聞社発行）1967年2月5日（32455号）一八面、本文7.5ボ1段組  
▼⑩ポール・クレアの食卓・12

## 214 春のオーロラ（はるのオーロラ）[205-207]

わたしがいま描く画面とはなに？

41行▽《風景》（悠々会発行）1966年3月号（7巻3号）五二～五三ページ、本文9ボ23行1段  
組▼⑥静かな家・10

## 215 挽歌（ばんか）[27]

洋燈は消え

14行▽詩集《液体》（草蟬舎刊）1941年12月10日、三ページ、本文五号1段組▼②液体・1

## 216 挽歌（ばんか）[74-76]

わたしが水死人であり

37行▽詩集《静物》（私家版刊）1955年8月20日、四二～四六ページ、本文五号11行1段組  
▼③静物・12

## 217 晩夏（ばんか）[453-454]

夏きたりなば

22行▽《流行通信》（流行通信発行）1977年10月号（164号）八～九ページ〈十月の詩〉、本  
文18級22行1段組▼⑨夏の宴・7

◆初出「写真・奈良原一高」。

## 218 晩春（ばんしゅん）[547]

ぼくは赤面する

4行▽《いけばな龍生》（龍生華道会発行）1962年6月号（26号）二ページ〈四行詩〉、本文16  
級ゴチック体1段組▼⑩ポール・クレアの食卓・8

◆初出「絵・堀内規次」。初出時〈理解のいとぐち〉（無署名、約180字）を付す。

## 219 晩鐘（ばんしょう）[694-698]

母は買物袋を

4節74行▽《新潮》（新潮社発行）1988年5月号（85巻5号・1000号）二八〇～二八三ページ、  
本文9ボ23行1段組▼②ムードロップ・15

## 220 斑猫（はんみょう）[544-546]

わたしの記憶の

30行▽《詩学》（詩学社発行）1960年1月号（15巻1号）八一ページ、本文9ボ18行2段組▼  
⑩ポール・クレアの食卓・6

## 221 ピクニック（ピクニック）[327-328]

まるで音楽のように

33行▽《芸術生活》(芸術生活社発行)1973年7月号(26巻7号)[一四〇〜一四一ページ]、  
本文12ポ20行1段組▼⑧サフラン摘み・7

222 人質(ひとじち)[119-121]

建物は人の半身と共に沙の首府へ沈み

28行▽詩集《僧侶》(書肆ユリイカ刊)1958年11月20日、六〇〜六二ページ、本文五号27字  
詰13行1段組▼④僧侶・17

◆執筆は1958年。

223 鄙歌(ひなうた)[555-557]

わたしの好きな常套句

26行▽《文學界》(文藝春秋発行)1969年12月号(23巻12号)九ページ、本文9ポ13行2段  
組(コラム)▼⑩ポール・クレアの食卓・15

◆初出時の標題「ヘアー」。

224 微熱ある夕に(びねつあるゆうに)[40-41]

紡車のはるかなる丘

9行▽詩集《液体》(草蟬舎刊)1941年12月10日、二二ページ、本文五号1段組▼②液体・18

225 微風(びふう)[38]

灰色の括弧の中にある星たちよ

6行▽詩集《液体》(草蟬舎刊)1941年12月10日、一六ページ、本文五号1段組▼②液体・14

226 白夜(びゃくや)[392-393]

たしかムンクの絵の主題に

28行▽《鷹》(鷹俳句会発行)1974年10月号(11巻10号)一八〜一九ページ、本文五号二分  
アキ17行1段組▼⑧サフラン摘み・23

227 ひやしんす(ひやしんす)[42]

午前の昇降機は六階に停まる

10行▽詩集《液体》(草蟬舎刊)1941年12月10日、二四ページ、本文五号1段組▼②液体・  
20

228 ヒヤシンス或は水柱(ヒヤシンスあるいはみずばしら)[310-312]

ミルクをのむときわれら男はいつも考える

40行▽《風景》(悠々会発行)1972年6月号(13巻6号)五二〜五五ページ、本文9ポ12行1  
段組▼⑧サフラン摘み・3

229 白狐(びゃっこ)[727-729]

いなりの屋根を降りる

42行▽《現代詩手帖》(思潮社発行)1984年6月号(27巻6号)三〇〜三二ページ〈特集・詩

の未来へ)、本文9ポ23行1段組▼未刊詩篇・16

◆初出註記「\*「現代詩手帖」二十五周年記念号に是非とも作品を寄せよ、との小田久郎氏の  
要請をこぼみがたく、十余年前の自動記述的な草稿に、若干の手を加え、『葉玉』の詩篇と同  
じ形態をととのえ、ここに発表する。 五月九日」。

230 病室(びょうしつ)[20-21]

患者は白い窓掛に指紋を忘れ

6行▽詩集《昏睡季節》(草蟬舎刊)1940年10月10日、二一ページ、本文9ポ1段組▼①昏睡  
季節・18

231 ヒラメ(ヒラメ)[215-218]

ヒラメは海のなかで泳ぐ

51行▽《凶区》(バッテン+暴走グループ)1966年10月(15号)三九〜四一ページ〈ゲスト  
作品〉、本文9ポ22行1段組▼⑥静かな家・13

◆初出目次での標題は「ひらめ」。

232 風景(ふうけい)[41-42]

猿の頭に夕の灯がとまり

10行▽詩集《液体》(草蟬舎刊)1941年12月10日、二三ページ、本文五号1段組▼②液体・  
19

233 風景(ふうけい)[70-71]

緑の樹は

28行▽詩集《静物》(私家版刊)1955年8月20日、三四〜三六ページ、本文五号11行1段組  
▼③静物・10

◆稿本では目次・本文とも〈クートーの風景〉という標題だったが、校正のある時点で〈風景〉  
に変わった。

234 フォークソング(フォークソング)[252-255]

むらさきのスマレが咲く

45行▽《同時代》(黒の会発行)1968年7月(23号)四二〜四四ページ、本文9ポ18行1段組  
▼⑦神秘的な時代の詩・7

◆初出時の標題「フォーク・ソング」(ただし目次では「フォークソング」)。

235 フォーサイド家の猫(フォーサイドけのねこ)[364-369]

わたしの部屋に一枚の小さな絵が掛けてある

\*印で5節に分かつ85行▽《ユリイカ》(青土社発行)1973年11月(5巻13号)五〇〜五四ペー  
ジ、本文9ポ(散文詩型は23字詰)22行1段組▼⑧サフラン摘み・17

◆初出目次には「猫の主題による長篇詩」とある。

236 不滅の形態(ふめつのけいたい)[363-364]

わたしに必要なのはミカンの皮でなく

20行▽《別冊小説新潮》(新潮社発行)1974年7月(夏季・26巻3号)二四～二五ページ、本文9ポ12行1段組(コラム)▼⑧サフラン摘み・16

237 冬(ふゆ)[10-11]

亜鉛の錘が雪の蠅をつぶす

6行▽詩集《昏睡季節》(草蟬舎刊)1940年10月10日、六ページ、本文9ポ1段組▼①昏睡季節・4

238 冬の歌(ふゆのうた)[65-67]

その夜の空の華やかでさびしい殷賑

40行▽詩集《静物》(私家版刊)1955年8月20日、二四～二八ページ、本文五号11行1段組▼③静物・8

◆初出献辞「〈tに〉」。吉岡の随想〈女へ捧げた三つの詩〉に依れば、tは池田友子。

239 冬の絵(ふゆのえ)[97-98]

他人には見えないものが いくつかぼくの部屋にある たと

21行分▽詩集《僧侶》(書肆ユリイカ刊)1958年11月20日、一八～一九ページ、本文五号27字詰13行1段組▼④僧侶・6

◆執筆は1956年。

240 冬の休暇(ふゆのきゅうか)[162-163]

そこでは灰色の馬と灰色でない馬とがすれちがう 灰色の馬

14行分▽《日本読書新聞》(日本出版協会発行)1960年3月7日(1043号)一面、本文新聞用活字一倍(正角)22字詰1段組▼⑤紡錘形・12

◆吉岡は同年2月27日の日記に「詩篇〈冬の休暇〉出来」と書いている。

241 冬の森(ふゆのもり)[724-725]

そのところに月は満ち

14行▽《朝日新聞〔夕刊〕》(朝日新聞東京本社発行)1965年1月5日(28377号)五面、本文新聞活字一倍扁平17行1段組(コラム)▼未刊詩篇・11

◆初出・絵「待つ・海老原喜之助」。

242 部屋(へや)[437-438]

塵のなかで

34行▽《新潮》(新潮社発行)1976年12月号(73巻12号)一四六～一四七ページ、本文9ポ21行1段組▼⑨夏の宴・2

◆初出はカット「福島秀子」。

243 紡錘形I(ぼうすいけいいち)[148-149]

首のまがった母それはまだ女であり 見えない骨の走る小さ

12行分▽《鰐》(書肆ユリイカ発行)1959年9月(2号)四～五ページ、本文9ポ25字詰1段組▼⑤紡錘形・4

◆初出時の標題「紡錘形1」。

244 紡錘形II(ぼうすいけいに)[149-150]

わたしの生きている今 わたしは触っているのだ それははず

13行分▽《鰐》(書肆ユリイカ発行)1960年3月(7号)二ページ、本文五号25字詰1段組▼⑤紡錘形・5

◆初出時の標題「紡錘形2」。吉岡は同年3月9日の日記に「昨夜できた〈紡錘形2〉を朝みる。まずよし、陽子に浄書してもらって、〈鰐〉へ送る」と書いている。

245 蓬萊(ほうらい)[628-633]

(人間が死なずにすむ

4節72行▽《歴史と社会》(リプロポート発行)1983年5月(2号)一五八～一六三ページ、本文9ポ18行1段組▼⑩薬玉・18

246 放埒(ほうらつ)[17-18]

真昼の影へ花粉がこぼれ

6行▽詩集《昏睡季節》(草蟬舎刊)1940年10月10日、一六ページ、本文9ポ1段組▼①昏睡季節・13

247 ポール・クレーの食卓(ポールクレーのしょくたく)[535-537]

孤独な心になじみの物は

37行▽《現代詩》(緑書房発行)1957年5月号(4巻4号)二一ページ、本文9ポ23行2段組▼⑩ポール・クレーの食卓・1

248 牧歌(ぼっか)[34-35]

歯車が夥しくおちてゆく

11行▽詩集《液体》(草蟬舎刊)1941年12月10日、一二ページ、本文五号1段組▼②液体・10

249 牧歌(ぼっか)[98-100]

村にきて

27行▽《今日》(書肆ユリイカ発行)1957年3月(7号)九ページ、本文9ポ15行2段組▼④僧侶・7

## ま 行

250 マクロコスモス(マクロコスモス)[233-236]

石の建築物といっても永遠

70行▽《三田新聞》(三田新聞学会発行)1967年11月22日(1146号〔創刊50周年記念号〕)九面、本文新聞活字一倍扁平35行1段組▼⑦神秘的な時代の詩・1

◆初出「イラスト・廣瀬俊恵」。

251 マダム・レインの子供（マダムレインのこども）[319-321]

マダム・レインの子供を

42行▽《ユリイカ》（青土社発行）1973年1月（5巻1号）一六～一七ページ、本文9ポ24行1段組▼⑧サフラン摘み・5

252 巫女——あるいは省察（みこ あるいはせいさつ）[165-167]

北欧的な濃霧のうすれるころ

35行▽《文學界》（文藝春秋新社発行）1960年11月号（14巻11号）一〇一～一〇三ページ、本文9ポ23行1段組▼⑤紡錘形・14

253 水鏡（みずかがみ）[447-453]

「冷たいスープの入ったガラスの

5節86行▽《文藝》（河出書房新社発行）1977年11月号（16巻11号）二六四～二六九ページ、本文9ポ23行1段組▼⑨夏の宴・6

◆題辞「〈肉体の孕む夢はじつに多様をきわめている〉 金井美恵子」。初出本文カット「中村忠良」。

254 水のもりあがり（みずのもりあがり）[163-164]

水のながれは止る その全面の硬い量の上をすべる 女と魚

22行分▽《鰐》（書肆ユリイカ発行）1960年5月（8号）二～三ページ、本文五号20字詰1段組▼⑤紡錘形・13

255 蜜はなぜ黄色なのか？（みつはなぜきいろなのか）[274-276]

蜜はなぜ黄色なのか？

29行▽《郵政》（郵政弘済会発行）1969年4月号（21巻4号）一四～一五ページ、本文8ポ1段組（コラム）▼⑦神秘的な時代の詩・12

◆初出目次での標題は「蜜はなぜ黄色なのか」。

256 みどりの朝に——朝の序曲（みどりのあさに あさのじょきょく）[44]

四月の鏡から柔かい卵が浮び上る

13行▽詩集《液体》（草蠲舎刊）1941年12月10日、二六ページ、本文五号1段組▼②液体・22

257 ムーンドロップ（ムーンドロップ）[668-673]

生ぬるいセルロイド色に

5節80行▽《潭》（書肆山田発行）1985年4月（2号）四～九ページ、本文9ポ21行1段組▼⑩ムーンドロップ・10

◆註記「\*題名と若干の章句をナボコフ『青白い炎』（富士川義之訳）から借用。」

258 無罪・有罪（むざい ゆうざい）[187-190]

判事はときどき歩く

\*印で4節に分かつ48行▽《現代詩》（飯塚書店発行）1959年3月号（6巻3号）一三～一八ページ、本文9ポ1段組▼⑥静かな家・2

◆初出「写真・大辻清司、構成・大森忠行」。

259 産霊（むすび）（むすび）[641-644]

〔聖なる蜘蛛〕

62行▽《ユリイカ》（青土社発行）1986年12月臨時増刊号（18巻14号）一六～一九ページ、本文9ポ22行1段組▼⑫ムーンドロップ・1

260 メデアム・夢見る家族（メデアム ゆめみるかぞく）[383-387]

わが家族はつどい来る

75行▽《文芸展望》（筑摩書房発行）1974年7月（夏・6号）一〇～一三ページ、本文9ポ21行1段組▼⑧サフラン摘み・21

261 面紗せる会話（めんしゃせるかいわ）[16-17]

花びらのうへに死んでゐる指のあとを

19行▽詩集《昏睡季節》（草蠲舎刊）1940年10月10日、一四～一五ページ、本文9ポ1段組▼①昏睡季節・12

262 模写——或はクートの絵から（もしゃ あるいはクートのえから）[191-194]

沼の魚はすいすい泳ぐ

47行▽初出未詳（長田弘は《現代詩手帖》1964年2月号の吉岡実論で本篇の3行を、おそらく初出から引用しているから、1963年12月までに発表されたか）▼⑥静かな家・4

263 喪服（もふく）[116-118]

ぼくが今つくりたいのは矩形の家

29行▽《今日》（書肆ユリイカ発行）1958年7月（9号）八～九ページ、本文9ポ17行1段組▼④僧侶・15

264 桃——或はヴィクトリー（もも あるいはヴィクトリー）[199-200]

水中の泡のなかで

28行▽《現代詩手帖》（思潮社発行）1965年3月号（8巻3号）二〇～二二ページ、本文五号15行1段組▼⑥静かな家・8

◆初出目次での標題は「桃・あるいはヴィクトリー」。

## や 行

265 夜会（やかい）[543-544]

母が今夜うんだ卵をだく少年は 眼をふせ

11行分▽《讀賣新聞〔夕刊〕》(読売新聞社発行)1959年9月28日(29776号)四面〈詩とデッサン〉、本文新聞活字一倍扁平19字詰1段組▼⑩ポール・クレーの食卓・5  
◆初出「え <sup>か やまたぞう</sup> 加山又造」。

## 266 夜曲(やきよく) [720-721]

夜それも初夏の夜 ぼくは召使としてつましく坐る

14行分▽《近代詩鑑》1959年10月(27号)六ページ、本文14ポ24字詰18行1段組▼未刊詩篇・8

◆初出末尾「一九五八・八・四」は、吉岡陽子さんに依れば「一九五九・八・四」が正しい。

## 267 やさしい放火魔(やさしいほうかま) [201-204]

夏ははげ頭なんか刈りたくないと

71行▽《無限》(政治公論社発行)1965年11月(秋季・19号)二二〜二五ページ、本文20級19行1段組▼⑥静かな家・9

## 268 遊子の歌(ゆうしのうた) [11]

朝夕の

5行▽詩集《昏睡季節》(草蟬舎刊)1940年10月10日、七ページ、本文9ポ1段組▼①昏睡季節・5

## 269 雪(ゆき) [78-80]

ふりつづく雪に

35行▽詩集《静物》(私家版刊)1955年8月20日、五二〜五五ページ、本文五号11行1段組▼③静物・14

## 270 雪解(ゆきげ) [659-660]

雲形定規を操作して

20行▽《文學界》(文藝春秋発行)1986年1月号(40巻1号)九ページ、本文9ポ1段組(コラム〈扉の詩〉)▼⑩ムードロップ・7

◆初出はカット「司修」。

## 271 夢のアステリスク(ゆめのアステリスク) [512-515]

その部屋は

\*\*\*節58行▽金子國義版画集《LE REVE D'ALICE——アリスの夢》(角川書店、1978年3月20日、限定版99部)の出版案内カタログ(角川書店)1978年2月、〔二〜三ページ〕、本文16ポ26行3段組、\*\*\*節60行▼⑨夏の宴・22

◆詞書「金子國義の絵によせて」。初出に註記「注 アステリスク=印刷用星形印\*のこと」なし。《金子國義 アリスの画廊》(美術出版社、1979年7月10日)に改稿再録(一二〇〜一二一ページ、本文13級1段組)。

## 272 夢の翻訳——紛失した少年の日の唄(ゆめのほんやく ふんしつしたしょうねんのひのうた) [54]

金魚が紛失する午後の音譜線を走る

12行▽詩集《液体》(草蟬舎刊)1941年12月10日、三六ページ、本文五号1段組▼②液体・32

## ら 行

## 273 雷雨の姿を見よ(らいうのすがたをみよ) [477-484]

「スナガニが砂を掘って

8節126行▽《海》(中央公論社発行)1978年5月号(10巻5号)三二〜三八ページ、本文9ポ25行1段組▼⑨夏の宴・14

◆題辞「「ぼくはウニとかナマコとかヒトデといった／動物をとらえたいのだ／現実はその棘皮動物に似ている」／飯島耕一」。

## 274 ライラック・ガーデン(ライラックガーデン) [540-542]

紫のいろは夜のみつぎもの

40行▽《今日》(書肆ユリイカ発行)1958年12月(10号)一八ページ、本文8ポ23行2段組▼⑩ポール・クレーの食卓・3

◆初出詞書「バレー〈ライラック・ガーデン〉より」。

## 275 楽園(らくえん) [435-436]

私はそれを引用する

31行▽《現代詩手帖》(思潮社発行)1976年8月号(19巻9号)二〇〜二二ページ、本文9ポ23行1段組▼⑨夏の宴・1

## 276 落雁(らくがん) [624-628]

《すべて(現世)は火をつけられ

4節67行▽《饗宴》(書肆林檎屋発行)1983年6月(夏・10号)一六〜二二ページ〈追悼詩〉、本文12ポ15行1段組▼⑩葉玉・17

◆題辞「(言葉よ 死の底より自らの蜜を分泌せよ) 鷺巢繁男」。

## 277 裸子植物(らししょくぶつ) [520-522]

人知れず野の草の上に

40行▽《肉体言語》(「肉体言語」舎発行)1979年3月(9号)六〜七ページ、本文16級26行1段組▼⑨夏の宴・25

◆詞書「大野一雄の舞踏〈ラ・アルヘンチーナ頌〉に寄せて」。

## 278 螺旋形(らせんけい) [465-468]

アネモネの咲く庭で

63行▽《海》(中央公論社発行)1977年5月号(9巻5号)三〇〜三二ページ、本文9ポ24行1段組▼⑨夏の宴・10

◆初出註記「\*ベケット・土方巽などの章句を引用した」。

## 279 裸婦（らふ）[152-153]

ぼくがあらゆる白痴の世界から奪い出そうとする 秘すべき

19行分▽《文學界》（文藝春秋新社発行）1959年11月号（13巻11号）一二二ページ〈「裸婦」他四篇〔〈陰画〉〈僧侶〉〈喪服〉〈単純〉〕〉、本文9ポ26字詰1段組▼⑤紡錘形・7

◆初出「カット・伊原通夫」。

## 280 立体（りったい）[240-244]

真夏の午後でも

61行▽《現代詩手帖》（思潮社発行）1967年10月号（10巻10号）六二～六五ページ、本文五号21行1段組▼⑦神秘的な時代の詩・3

## 281 ルイス・キャロルを探す方法（ルイスキャロルをさがすほうほう）[337-345]

〔わがアリスへの接近〕三人の少女（43行）◆註記「＊ルイス・キャロル〈鏡の国のアリス〉岡田忠軒訳より」と〔少女伝説〕ドジソン家の姉妹ルイザ マーガレット ヘンリエッタ（＊印で14節に分かつⅠおよびⅡの66行分）の109行▽《別冊現代詩手帖 ルイス・キャロル——アリスの不思議な国あるいはノンセンスの迷宮》（思潮社発行）1972年6月（1巻2号）一五七～一六四ページ、本文9ポ25行1段組▼⑧サフラン摘み・11

◆初出扉に「Photo by Lewis Carroll / Poem & Montage by Minoru Yoshioka」とある。初出目次での標題は「キャロルを探す方法」。

## 282 老人頰（ろうじんしょう）[141-143]

さびしい裸の幼児とペリカンを

46行▽《季刊批評》（現代社発行）1959年1月（春季・2号）一二七～一三〇ページ、本文五号15行1段組▼⑤紡錘形・1

## わ 行

## 283 わが馬ニコルスの思い出（わがうまニコルスのおもいで）[282-291]

花咲くスミレの墓地で

\*印で5節に分かつ163行▽《現代詩手帖》（思潮社発行）1969年10月号（12巻10号）三六～四三ページ、本文9ポ23行1段組▼⑦神秘的な時代の詩・16

◆初出掲載誌編集人・八木忠栄の〈編集日録抄〉同年8月25日（月）に「筑摩書房へ行き、吉岡実から詩「わが馬ニコルスの思い出」をもらう。170行を越す力作」とある。

## 284 わが家の記念写真（わがやのきねんしゃしん）[334-335]

おかあさんは腰巻きする人

23行▽《文學界》（文藝春秋発行）1973年11月号（27巻11号）九ページ、本文9ポ23行1段組（コラム（扉の詩））▼⑧サフラン摘み・9

## 285 忘れた吹笛の抒情（わすれたすいてきのじょじょう）[39]

喪服の馬車が通ってゆく

11行▽詩集《液体》（草蟬舎刊）1941年12月10日、一八ページ、本文五号1段組▼②液体・16

## 286 わだつみ（わだつみ）[646-648]

「祖父は山へ柴刈りにゆき

32行▽《毎日新聞〔夕刊〕》（毎日新聞東京本社発行）1985年1月5日（39054号）四面、本文新聞活字一倍扁平1段組▼⑩ムードロップ・3

◆初出「写真・佐々木正和」。

（畢）



## 編集付記〔初版〕

背景・現況 吉岡実さんが亡くなられてこの5月で5年になる。その間に《現代詩読本——吉岡実》(思潮社、1991年4月15日)を見たが、待望久しい全集あるいは全詩集はまだその姿を現わしていない。本文はまさに冀求されている。

意図・欠落 わたしは現在、その詩集《神秘的な時代の詩》をめぐって全18篇の評釈を書きついでいるが、前掲読本にまとめた〈吉岡実年譜〉〈吉岡実書誌〉だけではいかにも物足らず、手頃な作品リストの欠落を痛感していた。

経過・データベース 昨年、自宅にもMacintoshというパソコンを導入して、データベースの整理に努めてきた。結果、作品の全貌の手掛かりとなる一覧を(できれば綺麗な冊子の形で)手許に置いておきたいという誘惑に勝てなくなった。

成果・課題 これを機会に可能なかぎり初出に当たりなおしたが、索引本文でも触れているように〈晩夏〉と〈模写——或はクートの絵から〉(初出誌紙さえ未詳とは不甲斐ない)の初出が未見である。大方のご教示を乞う。

今後・抱負 来るべき全詩集の本文を基礎にした、その〈用語索引=コンコードダンス〉が渴望される。新倉俊一氏の《西脇順三郎全詩引喩集成》のような、現存著者との二人三脚なくしては生まれえない書物は難しだろうが。

謝辞・協力 前回の〈年譜〉〈書誌〉のときと同様、吉岡実夫人陽子さんのご配慮なくしては、この索引はまとめられなかっただろう。また、国立国会図書館ほかの各館にもたいへんお世話になった。衷心より感謝する。

1995年4月15日

小林一郎

## 吉岡実全詩篇標題索引〔改訂第2版〕への追記

1996年3月25日、待望の《吉岡実全詩集》が筑摩書房から刊行された(〈吉岡実詩集覚書〉で本索引初版に触れている)。本索引〔改訂第2版〕では新たに《吉岡実全詩集》掲載ノンプルの項目を立て、併せて初版の不備を正した。上述の〈晩夏〉は雑誌発行所から初出のコピーを、今回追補した〈序詩〉(《吉岡実全詩集》未収録)は寺田澄史氏から掲載書をいただいた。記して深甚なる謝意を表す。今後は、詩篇の初出形や未刊行の散文まで網羅した《吉岡実全集》の刊行が待たれる。(2000年12月16日)

## 《吉岡実全詩篇標題索引〔改訂第3版〕》公開に際して

《吉岡実全詩篇標題索引〔改訂第2版〕》で本索引の初版に追補した〈序詩〉(詩篇番号137)以降、〈海の章〉(35)、〈断章〉(174)、〈汀にて〉(191)、〈序詩〉(138)、〈絵のなかの女〉(40)の5篇の未刊詩篇を発見した(いずれも全詩集未収録)。こうしたこともあって、手許の編者本は訂正を要する赤字や未刊詩篇の書誌を印字した付箋で見苦しいありさまを呈している。当初は初出未詳の〈模写——或はクートの絵から〉(262)の探索が成った時点で本索引〔改訂第3版〕を上梓するつもりでいたが、とりあえず現時点で改訂し、公開する。それを後押しした要因がいくつかあるので、説明しよう。

第一に、2008年11月から2011年11月にかけて、《昏睡季節》から《ムーンドロップ》までの吉岡実の全詩集に収録された詩篇の本文校異を《吉岡実の詩の世界——詩人・装丁家吉岡実の作品と人物の研究》(<http://members.jcom.home.ne.jp/ikoba/>)に掲載したこと。詳細は同サイトの〈吉岡実詩集本文校異について〉に譲るが、この調査で吉岡の手入れが初出と初版のあいだで最も著しいことがわかった。これを踏まえて、定稿たる《吉岡実全詩集》(筑摩書房、1996)を補完する資料として、吉岡の和歌(短歌と旋頭歌)・俳句・詩篇を含む全詩業の初出形を発表順に記載した《吉岡実の全詩業》を作成中である(研究用のため、公開の予定はない)。この《全詩業》に対応した、詳細な初出情報を記した索引の改訂新版が不可欠になった。

第二に、本索引を電子ファイル化することで、頻繁な改訂作業に耐え、随時の公表が容易になること。これは《現代詩読本——特装版 吉岡実》(思潮社、1991)に掲載した〈吉岡実資料〉の不備の解消を目的としてウェブサイト《吉岡実の詩の世界》を開設した動機に等しい。もっとも電子ファイルをhtmlで記述するなら、本索引の冊子体の紙面の水準を維持することは難しい。漢字の異体字やルビによるふりがな表示のほか、本文の書体やサイズなど、レイアウト面の精度は望むべくもない。こうした状況に鑑みて、今回はDTPソフトAdobe InDesignでページアップしたものをPDFファイル化するのが最適だと判断した。印刷・製本こそしないものの、〔改訂第2版〕と同様、印刷物の版下として通用する紙面を目標に制作した。

第三に、そうした意図を実現するツールの扱いに慣れてきたこと。私は《吉岡実の詩の世界》を初めはAdobe GoLiveでオーサリングしていたが、現在はフリーソフトのKompoZerで作業している。KompoZerはわがサイトにはまず申し分なく、高価な市販ソフトの必要を認めない。しかし、私にとって印刷物はウェブページほどシンプルではない。《吉岡実全詩篇標題索引》初版は、MacintoshのワードプロセッサEGWORDで組み、LaserWriterでプリントアウトしたものを縮小して、両面コピーした。本文はリュウミンと中ゴシックの和文2書体で、淡緑の本文用紙のA版6部本など、いま見てもそれなりに美しい。〔改訂第2版〕には制作環境のクレジットがないが、Adobe PageMakerで組んで、こちらは軽印刷した。いずれにしても、いまの私に〔改訂第2版〕と同等の効果をウェブページで上げることは不可能である。

InDesignの機能を習得する意味も兼ねて、《吉岡実の全詩業》に先だって《吉岡実全詩集》の再現を部分的に試みた。活版印刷最後の大冊と謳われたこの書物の組版から学ぶべき点は多い。使用活字の選択と組体裁。標題や題辞・詞書まわりの行ドリと行間、それらがページの最



後に来たときの処理方法。詩句の本文では《葉玉》詩型の階段状の字下げ（とりわけ括弧類を含むときの調整方法）。今回、本文書体を選んだ小塚明朝体で表示できないUnicodeの漢字（これは未解決で、書体をMingLiU-ExBやPMingLiUに変えて仮置きしてある）。ときに、《眼の冒険——デザインの道具箱》（紀伊國屋書店、2005）の著者としても知られるグラフィックデザイナーの松田行正さんは、〈文字組み＝アイデンティティ〉で次のように語っている。

それからあらゆる雑誌を買ってきて、一週間集中して細かく研究しました。当時、木村裕治さんが担当されていた『ハイファッション』は気になる雑誌でした。でも、真似ようとしても真似られない壁があったんです。だから、どういう書体が使われていて、どういう組み方がされているのか、流行のレイアウトや文字組みはどんなものなのかと徹底的に研究していったんです。一つ何かをつかめばハードルはぐっと下がる。この作業はやっておいてよかったなど、今でも思いますね。（樋口泰行・中屋真紀《Adobe InDesign 文字組みの基本と実践》、誠文堂新光社、2010年1月29日、二九～三〇ページ）

私にとっての組版の研究は、分析と考察だけでは不十分だ。実際に組んで、指定したものがどのように組みあがるか実見しないと、最も重要な部分はみえてこない。細部の違いがはたして全体にどのような変容をもたらすか。生成の現場に立ちあうとは、それを見ずえることにほかならない。吉岡実詩の本文の校異——詩句の一字一字を照合して原稿や印刷物の状態を分析し考察すること——もまったく同じだ。吉岡は詩篇を執筆するだけでなく、《液体》を除くすべての単行詩集の本文を著者として制作者として校正し、（《ポール・クレアの食卓》以外の）全単行詩集の本文組を指定し、さらには造本装丁した。目に見えるすべてを指定して、12冊の詩集をつくった。詩人・装丁家吉岡実の作品の研究とは、その総体を相手どることだと片時も忘れてはならない。

2012年11月30日

小林一郎

### 吉岡実全詩篇標題索引〔改訂第3版〕

1995年5月31日 初版限定36部（A版6部・B版30部）発行  
 2000年12月31日 〔改訂第2版〕限定120部（A版20部・B版100部）発行  
 2012年11月30日 〔改訂第3版〕PDFファイル公開

頒 価 〔……〕円（税別）  
 編纂者 小林一郎（こばやし・いちろう）  
 発行所 文藝空間  
 〔…（住所）…〕  
 郵便番号 〔……〕  
 電話番号 〔……〕  
 郵便振替 〔……〕  
 組 版 もろだけんじ（トリウム商會）  
 出 力 トリウム商會  
 装 丁 もろだけんじ（トリウム商會）  
 版 画 小林一郎

#### ◎本書の仕様

A5判正寸（210×148mm）・左開き横組・本文64ページ2色（スミ・特色アカ）・表紙4ページ4色

◎Adobe InDesign CS6の設定

[索引]

- ・本文＝小塚明朝 Pro R（漢字・仮名・約物 11Q）+Adobe Caslon Pro Regular（英字・アラビア数字 11Q 文字垂直・水平比率各105%）字送り11H 行送り17H 42字詰め42行 天地／左右中央 段落先頭・折り返し字下げなし／行末約物半角／ぶら下げなし／行中の句点は全角ドリ／調整最小値四分
  - ・ノンブル（ノド寄せ）＝Adobe Caslon Pro Regular 14Q
  - ・柱（小口から13H下げ）＝Adobe Caslon Pro Regular+小塚明朝 Pro R 13Q
  - ・見出し（2行ドリ）＝小塚明朝 Pro M 16Q
  - ・中扉（2行ドリ）＝小塚明朝 Pro M（C15+M100+Y100〔特色アカ〕）16Q
- [目録（pp.10-16）] [奥付裏広告（p.64）\*]
- ・本文＝小塚明朝 Pro R 10Q 字送り10H 行送り16H 46字詰め・24字詰め\*44行 天アキ16.5mm／左右中央
  - ・見出し（2行ドリ）＝小塚明朝 Pro R 11Q

吉岡実の詩の世界——詩人・装丁家吉岡実の作品と人物の研究

<http://members.jcom.home.ne.jp/ikoba/>

小林一郎が調査・著述・作成する、詩人・装丁家吉岡実の人と作品を研究するページ。吉岡実の著書を資料面から補完し、鑑賞と研究に資する。年譜・書誌・参考文献目録ほか——ウェブサイト《吉岡実の詩の世界——詩人・装丁家吉岡実の作品と人物の研究》の概要

\*

本書は文藝空間刊、小林一郎編纂による吉岡実全詩篇  
 標題索引。ブック・デザインは編纂者、A5判フ  
 ランス装。全44頁横組。例言と編集付記が各1頁、索引  
 本文は35頁。全280篇の詩篇番号、詩篇標題・副題、  
 よみがな、本文冒頭1行、節数・本文行数、初出、単  
 行および備考を記載。組版・製本トリウム。印刷イン  
 フォメディア。A版6部・B版30部限定。——吉岡実  
 全詩篇標題索引〔初版〕送付用封筒に印刷した文面

\*\*

《吉岡実全詩篇標題索引〔改訂第2版〕》小林一郎編  
 纂、文藝空間刊。A5判48頁横組。例言、索引本文〔全  
 281篇（筑摩版《吉岡実全詩集》未収録の1篇を初版  
 に追補）の詩篇番号・詩篇標題・副題・よみがな・全  
 詩集掲載ノンブル、詩篇本文冒頭1行、節数・本文行  
 数・初出・単行、備考〕、編集付記、追補詩篇本文を  
 掲載。A版20部・B版100部の120部——吉岡実全詩  
 篇標題索引〔改訂第2版〕送付用封筒に印刷した文面

\*\*\*

《吉岡実全詩篇標題索引〔改訂第3版〕》小林一郎編  
 纂、文藝空間刊。A5判・本文64ページ横組・2色刷。  
 索引例言、詩篇目録、索引本文〔全286篇（筑摩書房  
 版《吉岡実全詩集》未収録の5篇を追補）の詩篇番号・  
 詩篇標題・副題・よみがな・全詩集掲載ノンブル、詩  
 篇本文冒頭1行、詩篇節数・詩句の本文行数・初出媒  
 体の詳細情報・初収録単行詩集あるいは変改収した  
 詩篇、備考〕、索引覚書を掲載。（2012年11月30日、  
 PDFファイル公開）——吉岡実全詩篇標題索引〔改  
 訂第3版〕ウェブサイト公開に際して掲載した文面

